平成 28 年度

千葉大学附属図書館 点検・評価報告書

平成２９年３月

はじめに

千葉大学附属図書館では，平成 29 年 1 月 5 日に点検・評価委員会，同 2 月 13 日に外部評価委員会を開催し，平成 22 年度以来 6 年ぶりの自己点検・評価，平成 25 年度以来 3 年ぶりの外部評価を実施した。今回の評価対象期間は平成 25～27 年度の 3 年間である。

外部評価委員は久留島典子東京大学附属図書館長，田村俊作慶應義塾大学名誉教授，佐藤義則東北学院大学図書館長，鈴木宏子一橋大学学術・図書部長にお引き受けいただいた。事前にご提出いただいた評価に加え，委員会当日の質疑においても，忌憚のない，かつたいへん有益なご助言を多数いただくことができた。ご多忙のなかお力添えを賜った皆様にあらためて御礼を申し上げたい。

前回の自己点検・評価後，当館は，総合メディア基盤センター（現・統合情報センター），普遍教育センター（現・全学教育センター）とともに「生涯学び続ける基礎的な能力」「知識活用能力」を持つ『考える学生』を育成するためのコンセプト「アカデミック・リンク」を平成 23 年度に立ち上げ，さらにアカデミック・リンク・センターが発足するといった大きな変化があった。その間，千葉大学を含む国立大学法人全体を取り巻く環境も変わってきたことは言うまでもなく，今回の評価でも改善すべき点として指摘のあった人員・予算面への影響は特に大きなものがある。

しかしながら，当館が本学の知識基盤を提供し，教育・学習，そして研究活動に対して支援を行っていくという立場に変わりはない。長年の懸案であった松戸分館の設備環境についても改修の目途がたち，当館は今後も新たな知の創出を紡ぐ場としての歩みを進めていくこととなる。

最後に，当館の活動に理解とご支援をいただいた徳久剛史学長をはじめとする本学の関係各位，及び学外の皆様に心より感謝申し上げるとともに，今回の自己点検・評価および外部評価をもって道程を振り返り，進むべき方向を照らす灯としたい。

千葉大学附属図書館長
竹内　比呂也

目　次

はじめに ……1

Ⅰ　点検・評価委員会報告
1. 開催日時・議事次第 ……4
2. 委員会名簿 ……5
3. 委員会規程 ……6
4. 評価結果 ……8

Ⅱ　点検・評価委員会資料集（兼：外部評価委員会資料集）
1. 附属図書館の概要 ……26
1.1.　アカデミック・リンク機能の推進
1.2.　中期目標・中期計画に係る活動
2. 管理運営 ……28
2.1.　運営組織
2.2.　専門部会
2.3.　耐震改修・増築・機能改修
2.4.　防災対策
2.5.　人材育成・研修
3. 予算・経費 ……37
3.1. 図書館資料費
3.2. 図書館運営費
3.3. 概算要求
4. 施設・設備 ……41
4.1. 延床面積と閲覧座席数
4.2. 学生あたりの閲覧座席数
4.3. 収容冊数
4.4. 利用者用 PC 台数
4.5. 業務システム
5. 学術情報資源 ……45
5.1. 所蔵資料
5.2. 電子資料
5.3. コレクション
6. サービス ……50
6.1. 利用対象者
6.2. 開館時間

6.3. 利用実績
6.4. 留学生サービス
6.5. ウェブサービス
7. 情報発信・広報 ……57
7.1. ウェブによる広報
7.2. 学術成果リポジトリ
7.3. 図書館職員による研究教育発表等
8. アカデミック・リンク・プロジェクト……63
8.1. コンテンツ形成（旧コンテンツ・ラボ）
8.2. 人的支援（旧ティーチング・ハブ）
8.3. 空間整備・評価（旧アクティブ・ラーニング・スペース）
8.4. 広報・成果普及
8.5. ALPS（アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成）プログラム
9. 地域・社会連携 ……70
9.1. 市民への公開
9.2. 高大連携
9.3. 千葉県内図書館との連携
10. 他機関図書館との連携 ……72
10.1. 国立大学図書館協会
10.2. 千葉大学，お茶の水女子大学，横浜国立大学における図書館連携（三大学連携）
10.3. 大学図書館と国立情報学研究所との連携・協力推進会議
10.4. その他
11. 各館特記 ……77
11.1. 本館
11.2. 亥鼻分館
11.3. 松戸分館
（参考資料） ……85
年度計画の実施状況に基づく自己点検・評価（抜粋）

平成２８年度附属図書館点検・評価委員会議事次第

１．日　　時　　平成２９年1月５日（木）　１４：３０　～　１５：５０

２．場　　所　　附属図書館本館２階大会議室

３．議　　題

（１）附属図書館点検・評価について

（２）その他

４．配付資料

資料１　　千葉大学附属図書館点検・評価委員会／外部評価委員会資料集

資料２ 千葉大学附属図書館点検・評価委員会出席者名簿

資料３ 点検・評価委員 評価まとめ

千葉大学附属図書館点検・評価委員会

委員長

竹内 比呂也　附属図書館長

委　員

桑原 聡　　附属図書館亥鼻分館長
木下 勇　　附属図書館松戸分館長
西村 靖敬　　人文社会科学研究科教授
新井 敏康　　理学研究科教授
大山 努　　附属図書館利用支援企画課長
高橋 菜奈子　附属図書館学術コンテンツ課長

千葉大学附属図書館点検・評価ワーキング・グループ

成澤 めぐみ　附属図書館利用支援企画課副課長
庄司 三千子　附属図書館学術コンテンツ課副課長
鈴木 伸一　　附属図書館利用支援企画課総務係長
池尻 亮子　　附属図書館利用支援企画課アカデミック・リンクグループ専門職員
武内 八重子　附属図書館学術コンテンツ課亥鼻分館係長
佐藤 啓威　　附属図書館学術コンテンツ課松戸分館係長
田川 裕美　　附属図書館学術コンテンツ課学術コンテンツグループ
福田 友里　　附属図書館利用支援企画課総務係

千葉大学附属図書館点検・評価委員会規程

制定　平成２２年７月１５日

（設置）

第１条　国立大学法人千葉大学点検・評価規程（平成 20 年 4 月 1 日制定）に基づき，千葉大学附属図書館（以下「附属図書館」という。）の教育研究活動支援，組織，運営及び施設・設備の状況について自ら点検・評価を行うため，附属図書館点検・評価委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（組織）

第２条　委員会は，次の各号に定める者をもって組織する。

一　附属図書館長

二　附属図書館亥鼻分館長及び松戸分館長

三　附属図書館図書館委員会（以下「図書館委員会」という。）から選出された委員若干名

四　利用支援企画課長及び学術コンテンツ課長

五　その他委員長が必要と認めた者

（委員長）

第３条　委員会に委員長を置き，附属図書館長をもって充てる。

２　委員長は，委員会を招集し，その議長となる。

（会議）

第４条　委員会は，委員の過半数の出席がなければ会議を開くことができない。

（ワーキング・グループ）

第５条　委員会は，点検・評価に関する専門的事項を調査検討するため，ワーキング・グループを置くことができる。

（点検・評価事項）

第６条　委員会は，次の各号に掲げる事項について点検・評価を行う。

一　附属図書館のあり方・目標に関すること

二　図書館資料及び学術情報に関すること

三　教育研究支援活動に関すること

四　組織，運営に関すること

五　施設・設備に関すること

六　財政に関すること

七　その他委員会が必要と認める事項

（点検・評価の取りまとめ及び公表）

第７条　委員会は，点検・評価の結果を取りまとめ，図書館委員会の了承を得て学長に報告することとし，その内容を学内外に公表するものとする。

（庶務）

第８条　委員会に関する庶務は，附属図書館利用支援企画課において処理する。

（改正）

第９条　この規程の改正は，図書館委員会の議を経るものとする。

（雑則）

第１０条　この規程に定めるもののほか，附属図書館の点検・評価に関し必要な事項は，委員会が別に定める。

附　則

１　この規程は，平成２２年７月１５日から施行する。

２　千葉大学附属図書館自己点検・評価委員会規程（平成１６年４月１日制定）は，廃止する。

附　則

この規程は，平成２４年４月１日から施行する。

附　則

この規程は，平成２８年１０月１日から施行し，平成２８年４月１日から適用する。

平成 28 年度 千葉大学附属図書館 点検・評価委員会 評価結果

評価指標	A：非常に良好である	……	十分な活動がなされている
	B：おおむね良好である	……	改善の余地がある
	C：やや不十分である	……	改善の必要がある
	D：不十分である	……	大幅な改善が必要である

2. 管理運営

【総評：B】
大学を取り巻く状況が厳しいなか，アカデミック・リンク機能強化のため管理職が増員されたこと，また施設面の整備を行ったことは高く評価できる。防災対策も着実に講じられている。
ただし，現状の業務量に対する職員の絶対数が不足しており，今後は現場を担う係長以下級職員の充実が望まれる。

◆各委員評価

A：非常に良好である	●●●●
B：おおむね良好である	●●●
C：やや不十分である	
D：不十分である	

◆評価コメント

アカデミック・リンク機能の強化のために，組織・人員の面からも，施設の面からも整備が進んだことは，高く評価できる。とくに，西千葉本館の L 棟の機能改修により，数年に亘って進められてきた施設整備が完了したといえる。アクティブ・ラーニング・スペースだけではなく，静かな学習空間も設置したことで，図書館の多様な機能が整備されたことは，高く評価できる。

アカデミック・リンク・センター機能強化のため，副センター長（部長相当職）と利用支援企画課副課長が増員されたことは評価できる。一方で現場の職員数が十分であるかは資料から判断できない。
2 つの専門部会がそれぞれの役割として機能していると見られるが，図書館サービスに対する図書館専門部会とアカデミック・リンク・センターの運営組織の役割分担がやや不明である。

アカデミック・リンク機能強化に向けて運営組織が整備され，また利用者とくに学生が学習する場としての機能改修がなされており，評価できる。

アカデミック・リンク機能を強化するために，運営組織の補強，改編を行なったことは評価できる。
そして，附属図書館の運営組織が全学と緊密に連携して，附属図書館旧館（現 K 棟）の耐震改修を皮切りに，本館全体の改修・増築，さらには亥鼻分館および松戸分館にも機能改修を実現したことは高く評価できる。
また，西千葉本館および亥鼻分館，松戸分館において，毎年防災訓練や防災対策が講じられていることも適切である。

職員の増員が困難な状況の中，副センター長および副課長をあらたに配置できたことは評価に値する。附属図書館の近年の活動が大学当局に高く評価されさらなる充実を期待されてのことと判断できる。一方，全体の職員数は，規模や活動内容に比して多いとは言えないが，各種研修等を積極的に活用することにより，職員の能力向上の一助としている。
また，N 棟，I 棟の整備に続くＬ棟の機能改修の実施により，短期間にアカデミック・リンクのコンセプトに基づく機能強化と耐震等に関する安全性の確保を果たすことができた。

かなり頻繁に組織機構図を改編してきた経緯がわかり，以前よりはシンプルとなっていることがわかる。ただし学術コンテンツグループと副課長の間から亥鼻分館係，松戸分館係とを結ぶ線の役割，関係についてはどのように理解したらよいのか，若干わかりにくさが残る。

全員が千葉大学図書館の方向性を理解して，セクショナリズムに陥ることなく，各人が最大限その能力を発揮していると評価できる。しかし，超過勤務はほぼ常態化していると言ってよく，職員の絶対数が不足している。

◆改善に向けての提言

アカデミック・リンク機能強化のために，人員が増加している点は評価できる。さらなる機能強化のためには，管理職クラスだけではなく，係長・係員クラスの人員増が望まれるところである。

課長，副課長，係・グループのそれぞれの役割を明記することはできないだろうか。

業務に見合った職員数の配置や業務全体の思い切った見直しが必要である。

◆その他中項目に対する評価・提言・コメント等

防災対策として図書館のオープンな場所を，震災等の緊急事態発生時における一時避難場所として考えおいてもよいのではないか。

3. 予算・経費

【総評：B】
電子ジャーナル等の電子的学術情報基盤の整備については安定的な予算確保の制度を構築している点，館外経費獲得により図書館資料費が上昇傾向にある点，概算要求により施設等整備が進められた点は評価できる。ただし大学総経費に占める割合は資料費・運営費ともに国立大学法人全体の平均に届かず，さらに改善を望みたい。また継続的なサービスや活動を行うためにも，安定した経費の確保が求められる。

◆各委員評価

A：非常に良好である	
B：おおむね良好である	●●●●●
C：やや不十分である	●●
D：不十分である	

◆評価コメント

概算要求により，アカデミック・リンク・センターの予算を獲得し，附属図書館と同センターとの共同の活動ができているものの，図書館運営費自体は年々減少傾向にある。図書館運営のためのベーシックな経費の確保が課題である。
図書館資料費は全体としては増加しているが，増大する電子ジャーナル費用の高騰に対して十分とはいえず，今後が懸念されるところである。

大学総経費に占める図書館資料費は，全国平均には届かないまでも上昇傾向にあること，また学生用図書費について館外経費の獲得に努めている点は評価できる。
図書館運営費が減少している点については，様々な機能の継続的な運営に不安が残る。

総合大学（区分 A）である国立大学において，図書館資料費の大学全体の経費に占める割合が千葉大学は見劣りがする。

図書館資料費，図書館運営費ともに，大学総予算に占める割合が国立大学法人全体および区分Ａの機関平均を下回っている点は改善が求められる。
附属図書館の増改築のために概算要求を取りまとめて実現に至ったこと，またアカデミック・リンク機能を強化するために学内予算や文科省予算を獲得してきたことは評価できる。

電子ジャーナル経費の高騰が続く中，購読タイトル維持のため経費を確保していることは評価できる。一方，図書資料費は他大学に比べても十分とは言えず，コンテンツによる学習支援上，早急に対応する必

要がある。

図書館機能の強化について，概算要求での経費確保は大いに役立ち，特に西千葉キャンパスで目に見える成果をあげている。今後，亥鼻，松戸キャンパスについても同様に進める必要がある。

資料費は微増ながらも，大学総経費に占める割合は全国国立大学法人平均，8学部以上の区分Ａよりも低い。また運営費は大学総経費に対する割合がずっと0．5のままで，全国国立大学法人平均，8学部以上の区分Ａの平均が0．7であるのに対して低いままである。

主として研究のためのリソースである学術雑誌については，比較的安定的に購読予算を確保するメカニズムが出来上がっており，利用状況をモニターしながら最も経済性の高い方法で購読されていると評価することができる。しかしながら，人文社会科学系の研究資源である大型図書やコレクションについては，これを購入するための予算の枠組みがない。また，学生用図書費についても，十分に措置されているとは言えない。

◆改善に向けての提言

図書館資料費の割合を大きくする交渉・努力を継続して頂きたい。

図書館資料費，図書館運営費については，上記の現状について，本学の学長・理事，経営層に粘り強く訴えていく必要があろう。

基盤的な経費の増額は当面期待できないため，図書資料費について個別の目的を策定し，図書館以外からの経費確保に努めることが必要である。また，電子ジャーナル購読についても，大学としての方向性を踏まえて基本的な方針を全学的に明確にすることが望まれる。

全国平均に比べても低い実態を訴え，善処を求める。高騰化する電子ジャーナルに抑制を世界的な大学間の連携で訴えていく。

資料費の絶対的な増加の必要性については，常に大学当局に訴え続ける必要がある。

◆その他中項目に対する評価・提言・コメント等

電子ジャーナル経費の上昇はやむえないが，将来においてその上昇に見合う減額をどこでするのか考えておく必要がある。

4. 施設・設備

【総評：B】
西千葉本館における N 棟・K 棟改築，それに続く L 棟の改修実現により座席数・収容冊数ともに増加している。また本館の利用者向け PC は館内設置・貸出用とも非常に利用が多く，今後も計画的な設置と適切な整備を行うことが求められる。
なお，全学の PC セキュリティ管理が厳しくなるなか，附属図書館管理の PC についても業務システムを含めてさらに慎重な対策が必要である。
一方で，老朽化が進む松戸分館，機能面で更新が必要となっている亥鼻分館については，施設・設備整備の早急な対応が求められる。

◆各委員評価

A：非常に良好である	●●
B：おおむね良好である	●●●●
C：やや不十分である	●
D：不十分である	

◆評価コメント

西千葉本館の施設改修にともない，延床面積や座席数が増加している。数だけでなく，固定席から可動式への質的な転換もみられる。
利用者用 PC については，本館貸出用 PC の貸出回数が大幅に伸びており，サービスとして定着したと評価できる。一方で，貸出用 PC のメンテナンスには管理コストがかかるため，無理のない方法でさらなる充実をはかることが必要である。
業務システムについては，本期間中は大きな更新がなく，安定稼働していると評価できる。

前評価期間の K 棟（旧館）の改築と I 棟 N 棟の新築に続いて，本館で L 棟（新館）の増改築が実現したことは，西千葉の学習環境向上として大いに評価できる。

少ない予算の中で十分な施設と設備が確保されているのは評価できる。これからも学生の学習の場としての整備を継続してほしい。

増改築により，延床面積と閲覧座席数，および学生あたりの閲覧座席数が微増していることは評価できる。
また，収容冊数も増加し，利用者用 PC が非常によく利用されており，台数を増やしたことも評価できる。

L 棟の増改築により，座席の増加とともにアクティブ・ラーニングへの対応が進んだ。教育用端末，貸出用

端末ともによく利用され成果をあげているが，潜在的な需要はさらにあると見られることから，一層充実したサービスの提供が望まれる。

松戸分館の状況は，記載ある西千葉の状況に比べてほど遠い。（全体段階評価 B，西千葉 A，松戸 C）

西千葉キャンパスの図書館本館の改修後，学生の利用数，満足度は大幅に上昇しており，施設面での評価も高い。また，改修後の本館が我が国における大学図書館の一つのモデルとして機能していることも高く評価すべきである。一方，キャンパス間格差が顕著になってきており，とりわけ老朽化が進んでいる松戸分館の全面的な増改築とそれによる機能改善を早急に実現する必要がある。また，亥鼻分館においても，比較的新しい施設ではあるが，機能面では古さが見え始めており，今後医学部新館の造営に合わせて，亥鼻分館の機能についての再検討が必要になろう。

◆改善に向けての提言

利用者用 PC への需要が高く，今後ますます増加することが予想される。貸出用 PC 以外についても利用状況を調査し，全学的な見地から計画的に，貸出用 PC・教育用端末・OPAC 用端末等の適切な整備を行っていくことが望まれる。

閲覧席等の施設面での充実は進んだので，次の段階としてはそれらをより効果的に使ってもらえるよう図書館からの働きかけが肝要となる。また，PC 等はセキュリティ対策を十分に確立し，安定的な運用を図ることも重要となる。

松戸分館の改修。

松戸分館の早急な増改築の実現，機能改善に向けて具体的なアクションを起こす必要がある。

◆その他中項目に対する評価・提言・コメント等

4.2 学生あたりの閲覧座席数　本館の改修により全国平均に届いているが，各分館を個別に見ると平均を下回ることから，今後は分館の環境改善も必要である。

5. 学術情報資源

【総評：B】
電子ジャーナルの高騰が国内外で課題となるなか，所蔵資料・電子資料ともに維持されている。また電子ブック増加，コレクション電子化も着実に進められている。
今後はデータベースも含めて，選定や利活用の方策をさらに検討することが必要である。
学生向け図書の新刊整備については早急な改善が望まれる。

◆各委員評価

A：非常に良好である	●●
B：おおむね良好である	●●●●●
C：やや不十分である	
D：不十分である	

◆評価コメント

図書・雑誌の所蔵資料，電子資料ともに，一定の冊数・タイトル数が維持されており，図書館運営費が減少する中，安定的に学術情報資源を確保できていると評価できる。

電子ジャーナルについて他大学でのパッケージ中止などを聞く中，タイトル数を維持していることは研究環境に資することとして評価できるが，そのための費用は 1.4 倍に増加(3.1 図書館資料費より)している。

予算が少ないながら研究のための学術情報資源の維持と利用がなされており，評価できる。

厳しい予算にもかかわらず，蔵書冊数，電子ジャーナル・電子ブックのタイトル数やデータベース数を維持していることは評価できる。

限られた予算の中で，契約額が高騰する電子ジャーナルのタイトル数を維持していること，電子ブックを着実に導入していることは評価できる。

全体的な数値としては，良好であるが，園芸学部の資源が他キャンパスに比べて学生数に対して少ない。学生からも特に開架図書が古いものばかりであり，新しい図書が少ないと不満の声も聞かれる。本を読まなくなっている学生の傾向もあるが，松戸ではネットで本館に予約して借りられるが，そのサービスを知らない学生も少なくない。
江戸・明治期園芸書コレクション，小寺駿吉文庫のコレクションのデジタル化は市民からも評判であるが，さらに充実が求められている。

主として研究用の資源である学術雑誌については，一定の予算の範囲内という条件はあるものの，ニーズを反映しつつ安定的に整備が続いていると言える。しかしながら，学生用図書については，特に新刊の整備が明らかに劣っており，対策が必要である。

◆改善に向けての提言

今後，増加が予想される電子ブックについて，選定・購入の方法や予算確保の検討を開始し，着実に整備していくことが必要である。

利用状況の比較は難しいが，限られた予算の中で契約する電子ジャーナルやデータベースが適切であるかの評価は継続的に行う必要がある。

予算面から情報資源の大幅な充実は見込めない。現在ある情報を効果的に活用するための方策の検討や利用者への広報・提案が求められる。（デジタル化資料の学習・研究への活用方法，電子ブックやデータベースの利用促進，等）

教員のみならず学生にも希望の図書のアンケート等もう少し徹底する必要がある。

学生用資料費の増加要求を継続的に行う必要がある。

6. サービス

【総評：B＋】
本館の増改築から時間が経過しても入館者数増加が継続している状況は，設備面や人的支援の充実を含め学生等利用者のニーズに応えていることの反映と言え，高く評価できる。
入館者数に対して貸出冊数の割合が減少している点や開館時間の効率的設定等については，引き続いて調査検討の余地がある。

◆各委員評価

A：非常に良好である	●●●●
B：おおむね良好である	●●●
C：やや不十分である	
D：不十分である	

◆評価コメント

西千葉本館で開館時間数を伸ばしていること，入館者数が増加していることは高く評価できる。

一方で，学生貸出冊数が，国立大学平均より少なく，実数でも減少していることについては，検討・改善の余地がある。
レファレンスや情報リテラシー教育などの図書館職員による人的な支援が実施されていたり，ウェブサービスの面でも利用回数が着実に増加していることは評価できる。

本館の入館者数の増加は，増改築による空間整備の成果として高く評価できる。

サービス面は評価できる水準にある。

開館時間を段階的に延長し，亥鼻分館では，特別利用により，教員および大学院生に対し24時間利用を可能にしたことは評価できる。
増改築の効果もあり，特に本館の入館者数が増加していることは評価できる。
各種ガイダンスや講習会への参加者数が増加していることは高く評価できる。

電子ジャーナルの普及等，入館者が減少する要素があるが，本館においてはアクティブ・ラーニング環境の充実等，新たな機能提供により入館者数が増加していることは評価できる。
　各館において，レファレンス，ガイダンスやリテラシー教育が継続的に高いレベルで提供されている。

松戸分館の学生には松戸ギャップも含めて，不満が聞かれる。また留学生にとっても利用しやすいサービスが求められる。（全体段階評価 B，西千葉 A，松戸 C）

限られた人員の中で多様なサービスが行われていることを評価すべきである。

◆改善に向けての提言

学生貸出冊数について，「学習とコンテンツの近接による能動的学習」というアカデミック・リンクのコンセプトが機能しているかという面からも，調査・検討する必要があると考えられる。

開館時間については常に延長の要望があると思われるが，各館の利用動向に応じた開館時間の設定や利用方法の提示等で，限られたリソースの中でより効率的な利用につなげられるのではないか。

学生の声をもっと聞く必要がある。

◆その他中項目に対する評価・提言・コメント等

開館時間の延長等による利用者数のデータを見たかった。

7. 情報発信・広報

【総評：A－】
附属図書館ウェブサイト，SNS ともに利用が定着し，着実な情報発信・広報が行われている。SNS については，他館，例えば旧六医大図書館と比較してトップクラスの利用度（Twitter フォロワー数および Facebook いいね！数）である点も評価できる。ウェブサイトについては掲載情報が直感的にわかりにくいという声もあり，ユーザビリティ面でさらなる改善も望まれる。
職員による論文・口頭発表，講師派遣は活発に行われており，学外への貢献も大きいと評価できる。
年間の見学・視察対応は平成 25～26 年度は 100 件 1000 人前後，改修から時間が経過した 27 年度も 71 件 611 人と多数あり，情報発信の一翼を担っている。

◆追加データ

附属図書館／アカデミック・リンク・センター見学・視察対応数

見学／視察	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
件数	110	93	71
人数	977	1096	611

附属図書館内調査（高校生見学，カウンターでの自由見学受付は含まない）

Twitter フォロワー数：1,734　Facebook いいね！数：489
附属図書館内調査，いずれも平成 29 年 1 月 4 日時点

◆各委員評価

A：非常に良好である	●●●●
B：おおむね良好である	●●●
C：やや不十分である	
D：不十分である	

◆評価コメント

ウェブサイトおよび機関リポジトリについては，あまり大きな変化がなく，総じて停滞気味である。その中にあって，SNS サービスを使った広報については，試行的なものから定常的なサービスになったと評価できる。
図書館員が論文・口頭発表，講師派遣という形で情報発信をしており，発表数だけでなく，数多くの職員が関わっている点は高く評価できる。

情報発信・広報について着実に実施されている。また図書館職員による活発な研究教育発表，講師派遣が実施されており，評価できる。

ほぼ満足できる水準にある。

日本で初めての機関リポジトリである千葉大学学術成果リポジトリが，コンテンツ件数およびアクセス回数を着実に増やしていることは高く評価できる。
職員が図書館やアカデミック・リンク・センターでの活動や実践に基づき，積極的に論文を発表したり，口頭発表を行なっていること，また国内の研修会等に講師を派遣し，人材育成に貢献していることは高く評価できる。

ウェブサイトや SNS での情報掲載，学術成果リポジトリに関する各種活動等，情報発信に積極的に取り組んでいる。また，図書館職員による論文・口頭発表や講師派遣も他大学に比べて活発に行われており，学内のみならず広く大学図書館へ貢献しているといえる。

この情報発信面ではたいへん進んだ取組みをしている。

図書館の月報や年報の発行が停止されている。

◆改善に向けての提言

ウェブ上での利用の変化の激しさに遅れることなく，効果的な情報発信やよりよいサービス提供を行うために，広報マインドと技術的センスをもった人材の育成と，状況変化に迅速に対応できるだけの予算確保が望まれる。

個人的な意見だが，付属図書館ウェブサイトを使い易くしてほしい。

◆その他中項目に対する評価・提言・コメント等

7.1.2 Twitter，facebook SNS による情報発信は学生向けに効果的と思われるが，どれくらい見られているのか？

8. アカデミック・リンク・プロジェクト

【総評：A】
教職協働により様々なプロジェクトが展開されており，コンテンツ制作，人的支援の充実，学習空間に係る各種調査等，大きな成果をあげている。亥鼻・松戸両分館への活動敷衍，プロジェクト継続に向けた優先度付けが今後の課題で，特に分館における展開は最重要事項である。

◆各委員評価

A：非常に良好である	●●●●●
B：おおむね良好である	●●
C：やや不十分である	
D：不十分である	

◆評価コメント

アカデミック・リンクの一貫したコンセプトのもと，教職協働で各種の活動を展開し，成果を出してきたことは高く評価できる。また，同じ活動の継続だけではなく，持続可能な取り組みとして維持していくために，適宜，プロジェクトを整理・再編していることも評価できる。

通常の図書館業務を行った上で，さらに多くのアカデミック・リンク・プロジェクトを教職協働で実施していることは多いに評価できる。

アカデミック・リンクの機能はこれからの大学図書館にとって重要さが増すと考えられ，そこでの多様な活動は評価できる。
様々な試みを継続させてほしい。

図書館職員とアカデミック・リンク・センターの教員が協働して，さまざまなプロジェクトを実施している。とりわけ，千葉大学学習状況・情報利用環境調査，学生に対するフォーカス・グループ・インタビュー調査，ブックトラックを用いた図書利用状況調査等を実施し，それらの調査結果に基づいて，学習環境の整備を図っていることは高く評価できる。

図書館の各職員がアカデミック・リンク・プロジェクトに参画し教員との協働で事業を推進することで，図書館としての機能向上とともに広く学習支援活動の展開にも貢献している。研究と実践の相互作用により大きな成果をあげていると言える。

松戸キャンパスにおいては遠隔視聴のため，やはり効果は限定的といわざるを得ない。アカデミック・リンクは分館内に整備されたアクティブ・ラーニングスペースは既存の空間を活用した暫定的な処置のためか，それほど学生に快適な空間といえずあまり視聴している学生がいない。学生ホールで流そうと，所管の学生生活係からは図書館の行事だからとセッティングの協力は得られなかった。セッティングぐらいは協力してくれるような，連携をはかることができればよいが。（全体段階評価 B，西千葉 A，松戸 C）

教職協働によるプロジェクト推進のモデルとして，また，これからの大学図書館機能のあり方を示す上でも我が国のリーディングモデルの一つであり，高く評価すべきである。

◆改善に向けての提言

アカデミック・リンクの活動の大部分が西千葉キャンパスで行われているため，今後は亥鼻・松戸キャンパスへの展開も検討されたい。

西千葉キャンパス中心に活動が推進されているため，亥鼻，松戸キャンパスへの早期展開が望まれる。施設更新や改組を伴う大きな視点での取り組みとともに，現在のリソースで着実に実現できる対策を進めることも重要である。

松戸分館の改修によって，物理的環境の向上と運営の連携。

限られた資源の中でプロジェクトを継続するためにプロジェクトの優先順位付けを行うべきではないか。

9. 地域・社会連携

【総評：B】
本館において実施している一般学外者への館外貸出は，大学図書館では例の少ない踏み込んだサービスであり，評価できる。一方，学外者利用は全体として減少傾向で，学内向けサービスとのバランスも踏まえて今後の取り組みを検討する必要がある。

◆各委員評価

A：非常に良好である	●●
B：おおむね良好である	●●●
C：やや不十分である	●●
D：不十分である	

◆評価コメント

市民への貸出を行うなど一般公開がなされており，高大接続・相互協力等においても千葉県内最大の大学図書館としての役割を十分果たしている。

市民への公開や千葉県立館図書館との連携など様々な取り組みを実施しているが，入館者数や貸出数の実績は減少傾向にある。

十分な水準にある。

市民への公開を行なっているが，登録者数や貸出冊数が減少傾向にある。また，高大連携に基づく高校

生への図書館利用カードの発行枚数も同様に減少傾向にある。これらの点については検証を行ない，場合によっては対策を講じる必要がある。

学外者へのサービスや県内の図書館との連携による相互協力体制，各種協議会における連携が確立されて一定の成果をあげている。特に本館において学外者への資料貸出を行っていることは高く評価できる。

分館は卒業生の利用に限られているが，とりわけ松戸分館の利用は極端に少ない。卒業生にも魅力がないことの表れである。（全体段階評価 B，松戸 C）

市民開放，市民への貸し出し，公共図書館との連携，古典籍の電子化・公開，機関リポジトリを介した研究成果の社会への発信などが行われている点は高く評価できる。一方，市民にも開かれた展示の実施など，コレクションを生かした社会連携をより積極的に行うことも検討されて良いのではないかと思われる。

◆改善に向けての提言

大学図書館として限られた資源の中で，地域・社会連携にどのように取り組もうとしているかの方針が見えない。

千葉県立図書館と千葉大学附属図書館との間で協定に基づき実施されている相互利用サービスに関しては，双方のいずれのホームページにも明示されておらず，形骸化している懸念がある。ニーズを調査する必要もあるが，差し当たりホームページ等を通じて，積極的に広報することが求められる。

学外者の利用は減少傾向にある。学内者へのサービスとのバランスを考慮の上で，学外者への新たな取り組みを検討しても良いかもしれない。また，協議会においては，より実践的な情報交換や具体的な事業展開について協力できると有意義である。

分館での卒業生以外の地域の利用について検討する必要がある。

コレクションを生かした社会連携をさらに検討すると良いのではないか。

10. 他機関図書館との連携

【総評：A】

委員やメンバーの派遣，連携事業推進など，国立大学図書館協会をはじめとして他大学・他機関との連携協力を積極的に行って先進館の義務を果たしており，高く評価できる。これらの活動が館内活性化にもつながっていると考えられるが，人員不足の点も踏まえると，取り組みの継続性を意識するなど個々の事業の見直しを不断に続けていくべきである。

◆各委員評価

A：非常に良好である	●●●●●●
B：おおむね良好である	●
C：やや不十分である	
D：不十分である	

◆評価コメント

国内の大学図書館が連携して取り組むべきさまざまな活動において，国立の総合大学として他の大学を牽引し，大学図書館界全体に対して貢献していることは高く評価できる。
三大学連携という独自な連携によって，新規事業に取り組み，成果を上げたことも高く評価できる。

国立大学図書館協会などの活動に積極的に関与し，また人材も多く送っている。こうした活動の維持・発展に多大な貢献をしていることは評価できる。

十分な水準にあり評価できる。とくに JUSTICE での活動を引き続き推進してほしい。

平成27年度に国立大学図書館協会の関東甲信越地区理事館を務めたほか，委員等を派遣するなどして，他大学・他機関図書館等との連携・協力を積極的に行なっていることは高く評価できる。

国立大学図書館協会をはじめとする多くの機関の活動に積極的に参画し，大学図書館における主要な取り組みに関与している。また，三大学連携のように既存の組織にとらわれない独自の連携体制も構築している。現場での業務と学外での連携活動の相乗効果により双方で成果をあげていると言える。

なかなか　連携の必要性はいわれても，実質的に連携することは難しいなか，連携をとれている方ではないだろうか。

お茶の水女子大学，横浜国立大学との連携については，PDA の実験という我が国でも先進的な取り組みを行った点が高く評価できるが，単発の事業にとどまらず，継続的な事業として推進する必要があると思われる。また，継続的な事業の実施が期待できないのであれば，連携体制の見直しなども行うべきである。

◆改善に向けての提言

学外の活動に参加することによるメリットもあると思われるが，千葉大学附属図書館での本務とのバランスが保たれるよう留意されたい。

11. 各館特記

【総評：B】
本館のＬ棟改修が完了し，施設面の充実で大きな前進があった。両分館についても，限られたリソースのなかでグループ学習空間整備や「1210 あかりんアワー」中継等の取り組みが進展しているが，本館との格差を埋めるべく，さらなる整備が求められる。
三館共通の取り組みとして学生選書企画が評価できる。

◆各委員評価

A：非常に良好である	●●
B：おおむね良好である	●●●●●
C：やや不十分である	
D：不十分である	

◆評価コメント

西千葉本館のハード面・ソフト面の整備が進む中，亥鼻分館・松戸分館でのアカデミック・リンク機能の展開が課題となってきている。両分館が，現有の設備・予算の中で学習環境の整備を行ってきたことは評価できるが，抜本的に施設面での整備が必要であるとともに，さらなる資料・サービスの充実に努めることが必要である。

各館で学習環境に関する取り組み，学生選書企画のような共通した取り組みがある一方，各館の特徴にあわせた企画を実施している。

各館の独自性を保ちつつそれぞれが十分な水準にあると思われる。

西千葉本館は，増改築によって，四つの建物ごとにそれぞれコンセプトと機能を分化させ，相互に補完しながら，多様なサービスを提供していることは高く評価できる。亥鼻分館においても会話可能エリアを設置し，松戸分館においても「アクティブラーニングエリア」を設置するなど，両分館においてもアクティブ・ラーニングを支援するための施設整備を行なっていることは評価できる。
本館，亥鼻分館，松戸分館のいずれにおいても，千葉大学 SEEDS 資金より提供された学生用資料費等を活用して，学生選書企画を実施していることは評価できる。

本館では，Ｌ棟の増改築により施設面での整備が完了したことは大きな成果である。松戸，亥鼻両分館ではそれぞれの特徴，状況にあわせた取り組みを実践している。

松戸分館については，施設面での課題もあり，アクティブ・ラーニング，アカリンアワー中継に充分に効果を発揮しえていない。

◆改善に向けての提言

アカデミック・リンク機能を全学展開するために予算を確保し，亥鼻分館・松戸分館においても機能強化していくことが望まれる。その際には西千葉で実現したコンセプトだけではなく，各キャンパスの実情にあった整備が必要である。

本館と分館の間でサービスに格差が生じている。各館に同じサービスが必要とは考えないが，それぞれの特徴に合わせて検討されたい。

亥鼻，松戸キャンパスへのアカデミック・リンク機能の展開のための取り組みに一層注力することが望まれる。また，資料保存について3館で調整を行うなど，連携できる事業についての検討も必要である。

改修に期待

千葉大学附属図書館

点検・評価委員会／外部評価委員会

資料集

評価期間　平成 25 年度～27 年度
各調査データについて，特に断りがないものは「学術情報基盤実態調査」による

1. 附属図書館の概要

千葉大学は，9 学部からなる総合大学（平成 27 年度時点）で，キャンパスは，西千葉（メインキャンパス。文・法政経・教育・理・工学部，他多数の施設），亥鼻（医・薬・看護学部・医学部附属病院等），松戸（園芸学部等），柏の葉（環境健康フィールド科学センター等）の 4 箇所に分かれている。附属図書館は，本館及び 2 つの分館で構成されており，各キャンパスの専門領域や人員構成に対応して下記のような特徴を有している。

- 本館（西千葉キャンパス）：特定分野に限らない総合的な蔵書構成。
- 亥鼻分館（亥鼻キャンパス）：医学・薬学・看護学関連資料を中心に所蔵。
- 松戸分館（松戸キャンパス）：園芸学・農学関連資料を中心に所蔵。

本館は，学部初年次には全学部生が西千葉キャンパスを中心に学習することから，教養課程から各専門分野まで対応する総合的な図書館であり，近年は後述するアカデミック・リンクの実践の場として学習支援活動を積極的に実践している。一方，両分館はそれぞれの分野に特化した専門図書館としての機能を強く持っている。

1.1. アカデミック・リンク機能の推進

アカデミック・リンクは，千葉大学において「生涯学び続ける基礎的な能力」「知識活用能力」を持つ『考える学生』を育成するために，附属図書館，総合メディア基盤センター（現・統合情報センター），普遍教育センター（現・全学教育センター）が協力して立ち上げた，教育・学習のための新しいコンセプトであり，その実現のために平成 23 年度にアカデミック・リンク・センターが発足した。あわせて附属図書館本館の増改築が順次行われ，平成 26 年度に異なった機能を持つ 4 つの棟の整備が完了し，アカデミック・リンクのコンセプト「学習とコンテンツの近接による能動的学習」を促進する取り組みが実施されている。

附属図書館は，アカデミック・リンク・センターの事務部門を担い所属教員による活動を支えているが，それにとどまらず図書館職員が教員と協力してアカデミック・リンク機能の実践を進めている。具体的には，「コンテンツ形成（旧コンテンツ・ラボ）」「人的支援（旧ティーチング・ハブ）」「空間整備・評価（旧アクティブ・ラーニング・スペース」という 3 つの機能を柱として多様なプロジェクトを実施することで新たな学習環境の提供を行っている。（詳細は，「大項目 8.アカデミック・リンク・プロジェクト」を参照）

1.2. 中期目標・中期計画に係る活動

各国立大学法人は，達成すべき業務運営に関する目標と，それを達成するための計画を，中期目標・中期計画として 6 年毎に策定しているが，本評価期間の平成 25～27 年度は，第 2 期中期目標期間（平成 22～27 年度）にあたっている。千葉大学では，『千葉大学憲章』に掲げた「つねに，より高きものをめざして」という理念を具現化し，使命を達成するための目標・計画を定めている。

その中の情報化技術を用いた教育方法の開発・充実や教育環境の整備・充実，快適な学習環境の実現といった点について，附属図書館／アカデミック・リンク・センターは，積極的な取り

組みを行ってきた。その成果は，各年度毎に行われる業務の実績に関する評価において，平成 23 年度以降毎年「戦略性が高く意欲的な目標・計画」として取り上げられている。平成 25～27 年度については，下記のとおりである。

平成 25 年度：

・電子教材の開発に関する共同研究講座を設置した。

・学習のための教材コンテンツを電子的に利用するための環境整備に向けて，複数の大学が参加するコンソーシアムの発足を準備した。

平成 26 年度：

・授業の事前事後学習を深めるための有益な図書やウェブサイトを案内する「授業資料ナビゲータ」を作成した。

・学習のための教材コンテンツを電子的に利用するための環境整備に向けてコンソーシアムを発足させ，関係機関との協議等を展開した。

平成 27 年度：

・スチューデント・アシスタントによる学習サポート（434 件）およびレポート作成セミナー（7 回開催，200 名参加）を実施した。

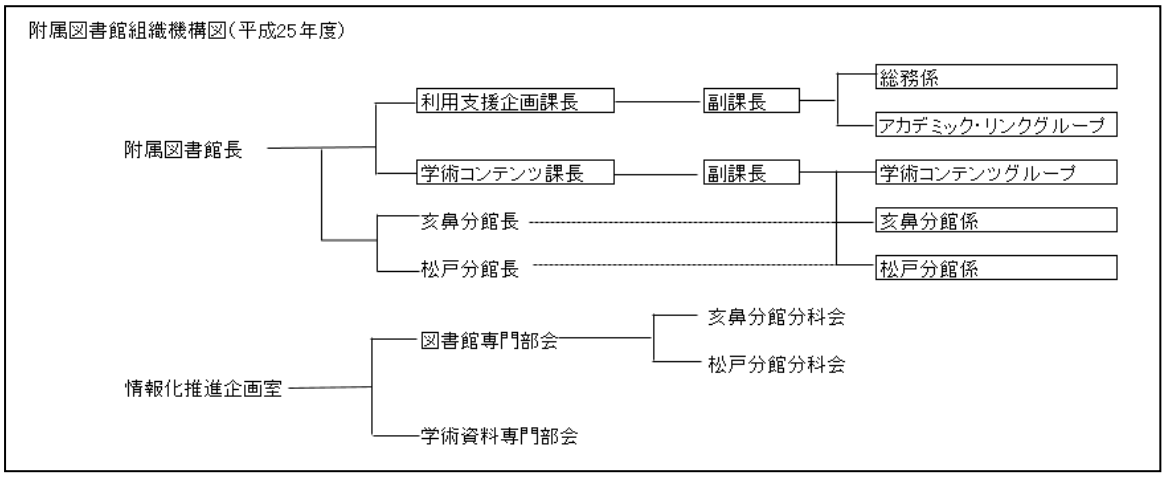
・PDA 方式（一定期間大量のコンテンツが利用可能な環境を用意し，その閲覧回数にもとづいて購入タイトルを決定する方式）による電子書籍購入を導入し，利用者の要求に対応したコンテンツ整備を実施した。

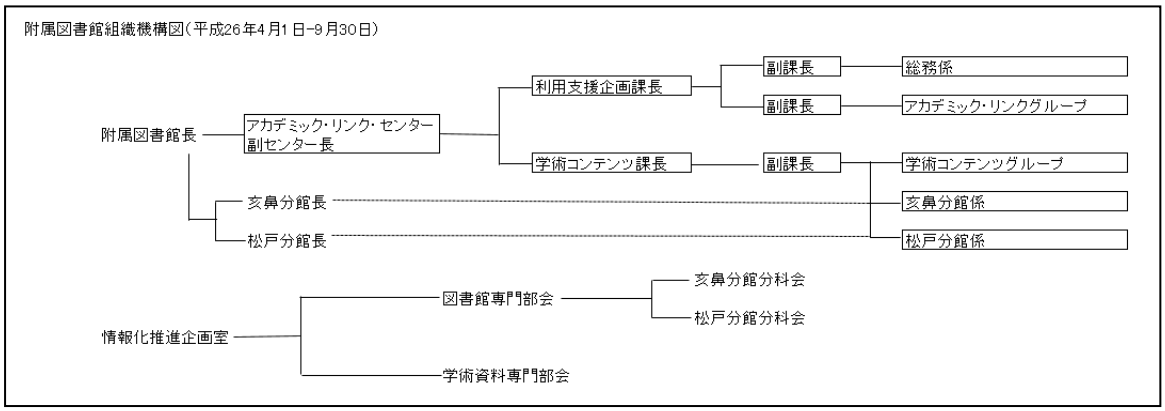
2. 管理運営

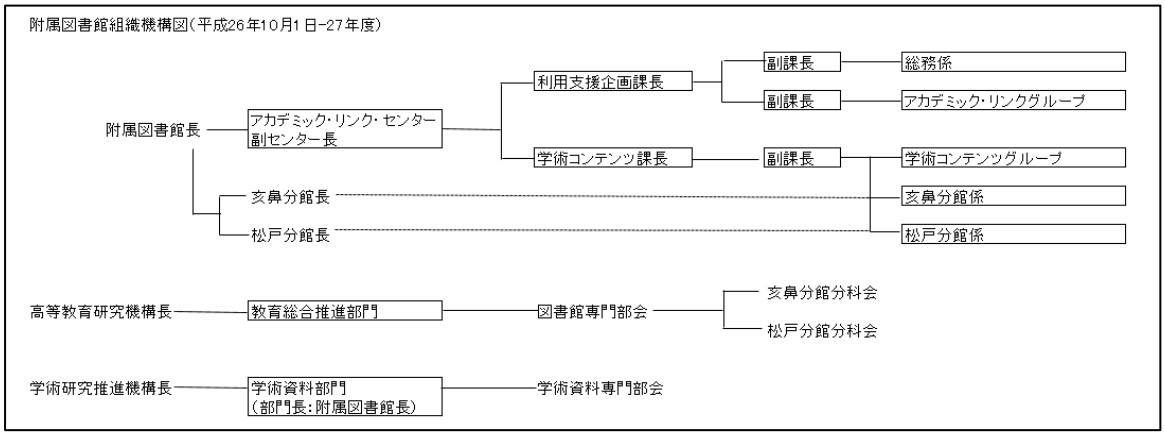
2.1. 運営組織

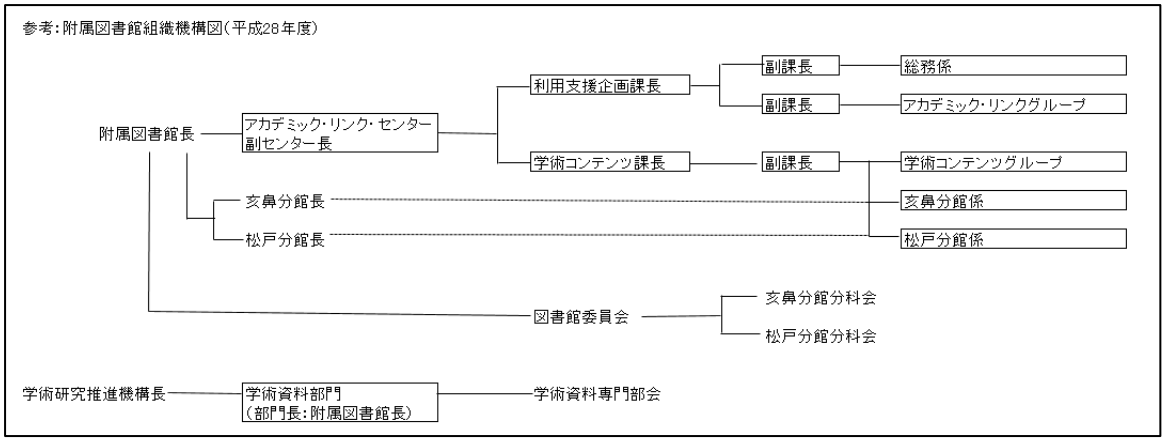
平成 26 年度，アカデミック・リンク機能強化のため，アカデミック・リンク・センター副センター長が部長相当職として配置された。また，同じく利用支援企画課副課長が 1 名増員となった。

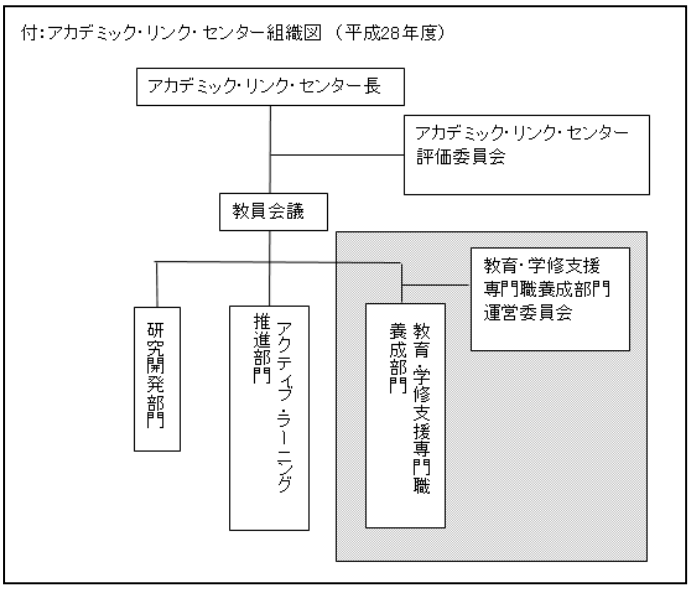
専門部会については 2.2 を参照。











本・分館別図書館職員の構成

職員種別	本　館	亥鼻分館	松戸分館	合　計
専任	19	2	2	23
臨時	19.3	4.9	0	24.2
業務委託等	6	4	4	14
計	44.3	10.9	6.0	61.2

（注：臨時職員の「19.3」等の数は専任職員の勤務時間に換算したフルタイム換算による）

2.2. 専門部会

平成 18 年度，情報化推進企画室の下に「図書館専門部会」と「学術資料専門部会」が設置された。図書館専門部会は附属図書館のサービスに係る検討・提言，学術資料専門部会は学術資料の整備・提供および学術情報発信に係る検討を目的とする。

平成 26 年 10 月，情報化推進企画室の改組に伴い，図書館専門部会は高等教育研究機構教育総合推進部門，学術資料専門部会は学術研究推進機構学術資料部門にそれぞれ設置となった。

（図書館専門部会は評価期間後の平成 28 年度廃止，附属図書館に図書館委員会設置）

活動状況

開催日	
平成 25. 11. 14	図書館専門部会
平成 26. 5. 22	図書館専門部会
平成 27. 3. 30	図書館専門部会
平成 27. 7. 17	図書館専門部会
平成 28. 2. 15	図書館専門部会
平成 25. 6. 27	学術資料専門部会分科会
平成 25. 7. 23	学術資料専門部会
平成 25. 11. 14	学術資料専門部会
平成 26. 5. 22	学術資料専門部会
平成 26. 6. 11	学術資料専門部会分科会
平成 26. 7. 16	学術資料専門部会分科会
平成 26. 7. 23	学術資料専門部会分科会
平成 26. 8. 4	学術資料専門部会
平成 26. 12. 25	学術資料専門部会
平成 27. 2. 3	学術資料専門部会分科会
平成 27. 2. 24	学術資料専門部会分科会
平成 27. 3. 18	学術資料専門部会分科会
平成 27. 3. 30	学術資料専門部会
平成 27. 7. 17	学術資料専門部会
平成 28. 2. 15	学術資料専門部会

（参考 1）

国立大学法人千葉大学高等教育研究機構教育総合推進部門図書館専門部会要項

（趣旨）

第１条　この要項は，国立大学法人千葉大学高等教育研究機構教育総合推進部門規程第７条第２項の規定に基づき，国立大学法人千葉大学高等教育研究機構教育総合推進部門図書館専門部会（以下「専門部会」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

（目的）

第２条　専門部会は，本学附属図書館（本館，亥鼻分館，松戸分館）のサービスについて検討・提言することを目的とする。

（業務）

第３条　専門部会は，次に掲げる業務を行う。

一　全学的な図書館サービスにかかる方針の策定に関すること。

二　その他附属図書館に関すること。

（専門部会長）

第４条　専門部会に，専門部会長を置く。

２　専門部会長は，教育総合推進部門長が指名する者をもって充てる。

３　専門部会長は，専門部会の業務を総括する。

（構成）

第５条　専門部会は，次に掲げる者をもって構成する。

一　附属図書館長

二　附属図書館亥鼻分館長及び松戸分館長

三　統合情報センター長

四　文学部，教育学部，法政経学部，各研究科（教育学研究科を除く。），各研究院，普遍教育センター及び国際教育センターから選出された教授各１名

五　学務部長

六　その他専門部会が必要と認める者

２　前項第４号及び第６号の委員の任期は２年とし，再任を妨げない。ただし，補欠の委員の任期は，前任者の残任期間とする。

（構成員以外の参画）

第６条　専門部会長は，必要と認めるときは，構成員以外の者を専門部会に参画させることができる。

（分科会）

第７条　専門部会に，分館等の事項について協議する分科会を置くことができる。

２　分科会に関し必要な事項は，別に定める。

（事務）

第８条　専門部会の事務は，附属図書館利用支援企画課において処理する。

（雑則）
第９条　この要項に定めるもののほか，専門部会に関し必要な事項は，別に定める。

附　則
１　この要項は，平成２６年１０月１日から施行する。
２　第５条第１項第４号及び第６号の規定により最初に委員となった者の任期は，同条第２項の規定にかかわらず，平成２８年３月３１日までとし，再任を妨げないものとする。

（参考 2）

国立大学法人千葉大学学術研究推進機構学術資料部門学術資料専門部会規程

（趣旨）
第１条　この規程は，国立大学法人千葉大学学術研究推進機構学術資料部門規程第８条第２項の規定に基づき，国立大学法人千葉大学学術研究推進機構学術資料部門学術資料専門部会（以下「部会」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定める。
（目的）
第２条　部会は，国立大学法人千葉大学（以下「本学」という。）における学術資料の整備・提供及び学術情報の発信について，検討することを目的とする。
（審議事項）
第３条　部会は，次に掲げる事項について審議する。
一　本学における学術資料の整備・提供に関すること。
二　本学における学術情報の発信に関すること。
三　その他学術資料及び学術情報に係る研究基盤の強化に関すること。
（部会長）
第４条　部会長は，附属図書館長をもって充てる。
２　部会長は，必要に応じ部会を招集し，その議長となる。
３　部会長に事故あるときは，部会長があらかじめ指名した分館長が，その職務を行う。
（構成）
第５条　部会は，次の各号に掲げる者をもって組織する。
一　部会長
二　附属図書館亥鼻分館長及び松戸分館長
三　統合情報センター長
四　文学部，教育学部，法政経学部，各研究科（教育学研究科を除く。）及び各研究院から選出された教授　各１名

五　その他部会が必要と認めた者

２　前項第４号及び第５号の構成員の任期は２年とし，再任を妨げない。ただし，補欠の構成員の任期は，前任者の残任期間とする。

（構成員以外の参画）

第６条　部会長は，必要と認めるときは，構成員以外の者を部会に参画させることができる。

（分科会）

第７条　部会に，専門の事項について調査・検討する分科会を置くことができる。

２　分科会に関し必要な事項は，別に定める。

（事務）

第８条　部会の事務は，附属図書館利用支援企画課において処理する。

（雑則）

第９条　この規程に定めるもののほか，部会に関し必要な事項は，別に定める。

附　則

１　この規程は，平成２６年１０月１日から施行する。

２　第５条第１項第４号及び第５号の規定により最初に構成員となった者の任期は，同条第２項本文の規定にかかわらず，平成２８年３月３１日までとし，再任を妨げないものとする。

2.3. 耐震改修・増築・機能改修

2.3.1. 経緯

平成 22 年度の概算要求で措置された附属図書館改修増築工事は，K 棟（旧館）の耐震改修を第 1 期工事，N 棟，I 棟の新築を第 2 期工事として着工したが，平成 23 年 3 月の東日本大震災の影響等から竣工時期が大幅に遅れ，平成 23 年 10 月にK 棟がリニューアルオープンした。また，同時に平成 23 年度国立大学教育研究特別整備費の配分を受け，什器や無線 LAN 設備などの整備を行った。平成 24 年 3 月に竣工記念式典を挙行し，N 棟，I 棟を含めた附属図書館がフルオープンした。N 棟には対話をしながら学習ができる新しいコンセプトの空間（アクティブ・ラーニング・スペース）を設置した。

平成 23 年度から運営費交付金特別経費（プロジェクト分）が認められ，平成 23 年 4 月にアカデミック・リンク・センターが設置された。平成 24 年 3 月の建物のオープンに伴い，アカデミック・リンクの活動を本格的に開始した。

平成 24 年度になって本館で最後に残った L 棟（新館）の機能改修が俎上に上り，平成 26 年度の概算要求を行った。施設環境部との打合せにより概算要求内容は L 棟の増築及び改修と決まり，情報化推進企画室図書館専門部会への報告を経て，文部科学省に提出された。この要求事項は当初予定より早まり，平成 24 年度の補正予算として認められた。

松戸分館についても平成 24 年 8 月に小規模なアクティブ・ラーニング・スペースが設置された。また，亥鼻分館も同時期にアクティブ・ラーニング対応の什器を導入した。

2.3.2. 進展

平成 25 年 11 月から本館改修工事が始まり，平成 26 年 10 月に完了した。L 棟には，アクティブ・ラーニング・スペースを増設するとともに，キーボードのある機器やイヤフォン等の利用も制限した完全に静かな学習空間（静寂閲覧室）を設置し，学生の多様な学習要求に応えられるよう配慮している。また，カフェのような雰囲気をもち学習の合間のリフレッシュも意図した空間（ラウンジ），授業紹介動画を流せる大型ディスプレイ等配置した情報発信エリア（ブックハウス）も整備され，さらに機能を拡充した。

また亥鼻分館は平成 27 年 12 月に 2 階グループ閲覧室を転用し，会話可能エリアを試行的に設置した。松戸分館も平成 24 年度設置のスペースが狭小であることから，新たに可動式什器やホワイトボード 20 台を配置する等して，平成 27 年 11 月に「アクティブラーニングエリア」の利用を開始した。

2.4. 防災対策

平成 23 年 3 月の東日本大震災の際には，本館（昭和 43 年建築）は耐震改修工事の準備中で，図書館の資料の搬出は終わっており，使用可能なエリアの図書数千冊は落下したが，特に人的被害はなかった。古い積層型書庫は改修時に撤去された。

平成 24 年度に K 棟改修および N･I 棟増築，平成 26 年度に L 棟改修が行われ，本館の全ての建物の整備が完了した。その際，書架をアンカーで固定するなど防災上の補強を施している。平成 26 年度以降は，整備された建物にあわせて，全学の防災訓練とは別に図書館独自の訓練を実施している。本館は，4 つの建物で構成され避難経路も複雑であるため，実際の災害発生時には職員による円滑な避難誘導が重要である。そのため，訓練では地震や火災の発生を想定し，定められた役割に沿って全職員が行動する実践的な形式を採用している。また平成 27 年度の訓練では，学内の総合安全衛生管理機構より講師を招き，一次救命処置の研修として，講演と AED（自動体外式除細動器）実習を行った。

亥鼻分館ではキャンパスの防災訓練に加え，消防器具や避難設備・経路の確認，利用者に対する避難誘導訓練を行った。

松戸分館は，キャンパスの自主防災体制に組み込まれており，毎年避難・救護訓練を実施している。

防災用品としては，飲料水，食料，簡易トイレ，毛布，ヘルメット等を本館および亥鼻，松戸の両分館に備蓄している。また，AED は本館と亥鼻分館については館内に，松戸分館については隣接する管理棟に設置されている。

2.5. 人材育成・研修

年度初めに人材育成のため研修情報の館内共有を図り，職位研修・業務に係る研修について，計画的，積極的に職員の受講をすすめている。

研修等受講者数

学外／学内	名称	平成25年度	平成26年度	平成27年度
学外	マネジメント・セミナー（国立大学図書館協会）	2	2	3
学外	関東甲信越地区国立大学図書館職員研修会（国立大学図書館協会）	1	1	－
学外	関東甲信越地区フレッシュパーソンセミナー（国立大学図書館協会）※平成26年度は東京地区協会・関東甲信越地区協会合同	2	2	－
学外	東京地区協会職員企画による研修（国立大学図書館協会）	－	1	－
学外	大学図書館職員長期研修（筑波大学）	1	－	1
学外	大学図書館職員短期研修（東京大学附属図書館）	1	2	1
学外	学術情報ウェブサービス担当者研修（国立情報学研究所）	1	－	－
学外	学術情報システム総合ワークショップ（国立情報学研究所）	－	1	1
学外	学術情報リテラシー教育担当者研修（国立情報学研究所）	1	－	－
学外	機関リポジトリ新任担当者研修（国立情報学研究所）	－	－	1
学外	情報処理技術セミナー（国立情報学研究所）	－	1	－
学外	目録システム講習会（雑誌コース）（国立情報学研究所）	2	1	－
学外	目録システム講習会（図書コース）（国立情報学研究所）	－	2	－
学外	科学技術情報研修（国立国会図書館）	1	－	－
学外	図書館等職員著作権実務講習会（文化庁）	1	－	2
学外	千葉市図書館情報ネットワーク協議会研修会（千葉市）	1	－	－
学内	幹部職員研修	1	3	1
学内	副課長級研修	1	1	－
学内	係長（専門職員）研修	－	2	2
学内	新採用職員研修	1	－	2
学内	事務系情報セキュリティ講習会	－	6	6
学内	事務情報化講習会	2	3	－
学内	事務職員向け広報研修	－	－	6
学内	ハラスメント防止に関する講演会	1	4	1
学内	メンタルヘルス講習会	－	4	2
学内	若手職員スキルアップ研修	－	1	－
学内	放送大学受講	2	7	5
学内	語学研修	1	－	1
学内	TOEIC受験	3	4	8
学内	中国語検定試験	－	－	1

3. 予算・経費

3.1. 図書館資料費

図書館資料費のうち，図書費は，特に学生用図書費について館外経費を獲得することで平成 24 年度数値から微増を保っている（33,214→34,818 千円）が，一方，電子ジャーナルは 240,177→342,480 千円と 1.4 倍超となっており，他大学と同様，本学でも電子ジャーナル費用が他の資料費を圧迫している傾向が読み取れる。

大学総経費に占める資料費の割合はわずかながらも拡大しているものの，国立大学法人平均，および 8 学部以上の区分 A の機関平均ともやや下回る数値である。

図書館資料費の内訳平成 27 年度実績本・分館合計（千円未満四捨五入）

図書			34,818 千円
		和	19,891 千円
		洋	14,927 千円
雑誌			48,338 千円
		和	18,179 千円
		洋	30,159 千円
電子ジャーナル	出版社	国内	1,757 千円
		国外	329,244 千円
		計	331,001 千円
	その他	国内	2,388 千円
		国外	9,091 千円
		計	11,479 千円
	計	国内	4,145 千円
		国外	338,335 千円
		計	342,480 千円
電子書籍・データベース	電子書籍	国内	3,889 千円
		国外	3,644 千円
		計	7,533 千円
	データベース	国内	5,117 千円
		国外	36,793 千円
		計	41,910 千円
	計	国内	9,006 千円
		国外	40,437 千円
		計	49,443 千円
その他			6,512 千円
図書館資料費（合計）			481,591 千円

図書館資料費の経年変化 （単位：千円）

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
大学総経費	64,115,672	67,101,753	63,612,323
本館資料費	361,705	428,542	440,042
亥鼻分館資料費	35,440	28,960	32,211
松戸分館資料費	8,820	8,769	9,338
（本分館合計）	405,965	466,271	481,591

大学総経費に占める図書館資料費の割合

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
千葉大学	0.6%	0.7%	0.8%
全国平均（国立大学 全体）	0.8%	0.8%	
全国平均 （国立大学 区分A[8学部以上]）	0.9%	0.9%	

3.2. 図書館運営費

図書館運営費は減少傾向にあり，大学総経費に占める割合はここ数年 0.5%止まりとなっている。国立大学法人の全体および区分 A の機関平均よりやや低い数値が続いている。

図書館運営費の内訳平成 27 年度実績本・分館合計 （千円未満四捨五入）

人件費	202,908 千円
その他の経費	88,946 千円
図書館・室運営費（合計）	291,854 千円

図書館運営費の経年変化 （単位：千円）

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
大学総経費	64,115,672	67,101,753	63,612,323
本館運営費	278,165	261,653	225,924
亥鼻分館運営費	41,620	49,528	40,120
松戸分館運営費	24,744	26,682	25,810
（本分館合計）	344,529	337,863	291,854

大学総経費に占める図書館運営費の割合

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
千葉大学	0.5%	0.5%	0.5%
全国平均（国立大学 全体）	0.7%	0.7%	
全国平均 （国立大学 区分A[8学部以上]）	0.7%	0.7%	

3.3. 概算要求

3.3.1. 経緯

平成 8 年度に亥鼻分館新営が実現した後，従前から附属図書館の課題であった本館（旧館）の増改築を概算要求の大きな目標と定め，本格的に取り組みを開始した。平成 11 年度には総合メディアホール（仮称）として現在の要求の原型が作られ，その後継続して施設整備費として概算要求を続けたが，実現には至らなかった。

その後，平成 20 年度に要求の過程で学内的にいくつかの大きな動きがあった。 ひとつは，研究担当理事が室長を務める情報化推進企画室の下に総合メディアホール整備計画検討専門部会が設置され，総合メディアホール（仮称）の整備計画について学内での認知度を高めるために本格的に検討が開始されたことがあげられる。もうひとつは，その検討過程で施設環境部との定期的な打合せが開催されたことである。このことにより施設環境部に総合メディアホール（仮称）整備の重要性が認識され，大きな協力を得ることができた。3 点目としては，こうした検討の結果による総合メディアホールの必要性・重要性を年度末に学長や理事，部局長などに説明する機会が得られたことである。

これらの活動によって附属図書館増改築の概算要求は，学生への学習・教育支援機能を持った総合メディアホール（仮称）整備計画として具現化する素地が作られることとなった。

平成 21 年度には上記専門部会の下に設置されたワーキング・グループで概算要求の検討を重ね，関連諸会議，役員会報告，理事説明，学長説明などを経て学内理解を得た上で学内順位 1 位で文部科学省に要求を提出することができた。その結果，施設要求（耐震改修と増築）については，ほぼ要求通りの面積が概算要求として認められ，平成 22，23 年度に「アカデミック・リンク」構想として，附属図書館旧館（現在の K 棟）の耐震改修及び新棟（N，I 棟）増築が行われた。工事途中で東日本大震災の影響を受けたため当初計画よりは遅れたものの，平成 24 年 3 月に一般利用を開始した。なお，この時整備された一連の建築は，平成 24 年度のグッドデザイン賞および千葉市都市文化賞に選定された他，文部科学省による「国立大学等の特色ある施設 2012」に取り上げられるなど，高い評価を受けている。

また，設備面では，平成 23 年度の国立大学教育研究特別整備費においてもアカデミック・リンク整備のための費用が措置され，什器，無線 LAN の整備等を行った。

3.3.2. 進展

平成 23 年度のアカデミック・リンク・センター発足以降，附属図書館は同センターと一体となり様々な活動に取り組んできた。その活動を推進するため，平成23～26年度にかけては「アカデミック・リンクによる千葉大学の教育改革」，平成 27 年度は「学士課程教育の改革に向けた新たな教学支援システムの構築」として，特別経費（教育研究プロジェクト分）予算を獲得しているが，さらなる機能強化を継続的に図るため，安定的な予算獲得の道筋をつける必要がある。

さらに，千葉大学における最優先の戦略・取組をまとめた『TOKUHISA PLAN』において明記されているとおり，アカデミック・リンク機能を全学的に展開することも大きな課題である。数年来の取り組みで附属図書館/アカデミック・リンク機能は強化されたが，活動の場は西千葉キャンパスが中心であり，他キャンパスにおいては充分とは言えない状況にある。特に松戸キャンパスについては，松戸分館の老朽化・狭隘化が著しく，学習環境に大きな支障をきたしている。平成 25 年度以降，具体的なプランを策定し，施設整備費として概算要求を行っているが実現には至っていない。早期実現に向けてより実効性のある取り組みを強力に進めて行く必要がある。

この他，アカデミック・リンク・センターは，平成 27 年度に教育関係共同利用拠点（「教職員の組織的な研修等の共同利用拠点（教育・学修支援専門職養成）」）として文部科学大臣から認定され，そのための予算が措置されることとなった。このことにより，今まで行ってきたプロジェクトの成果をふまえ，全国の大学職員を対象とした，より高度で実践的な教育・学修支援専門職を余生するための取り組みを開始した。

4. 施設・設備

4.1. 延床面積と閲覧座席数

本館は平成 23, 26 年度に大規模な改築を行った。平成 26 年度の L 棟増築では閲覧座席が 50 席増加となり, 固定席から可動式アクティブ・ラーニング向け閲覧座席への変更も行っている。

本館

K 棟(旧館)(RC3F 4,427 ㎡)昭和 43 年 4 月竣工, 平成 23 年 6 月改築(4,185 ㎡)

L 棟(新館)(RC4F 4,929 ㎡)昭和 56 年 2 月竣工, 平成 26 年 8 月増改築(5,543 ㎡)

I棟(RC4F 2,123 ㎡)平成 23 年 12 月竣工

N 棟(RC4F 3,957 ㎡)平成 23 年 12 月竣工

亥鼻分館 昭和 46 年 3 月竣工(医学部分館, 1,128 ㎡)

新館(RC3-1 3,784 ㎡)平成 8 年 7 月竣工

松戸分館 昭和 38 年 4 月竣工(園芸学部分館), 増築部分(565 ㎡ 計 1,009 ㎡) 昭和 58 年 3 月竣工

図書館名	延床面積(㎡)	閲覧座席数
本　館	15,808	1,485
亥鼻分館	3,784	263
松戸分館	1,009	128
合　計	20,601	1,876

参考:平成25年度千葉大学附属図書館外部評価報告書

図書館名	延床面積(㎡)	閲覧座席数
本　館	15,257	1,435
亥鼻分館	3,784	259
松戸分館	1,009	128
合　計	20,050	1,822

4.2. 学生あたりの閲覧座席数

学生 1 人あたりの閲覧座席数は本館改築等により微増している。国立大学法人全体, および 8 学部以上の区分A大学の平均値と同等である。

学生数	閲覧座席数	学生あたりの閲覧座席数
14,779	1,876	0.13

参考:平成25年度千葉大学附属図書館外部評価報告書

学生数	閲覧座席数	学生あたりの閲覧座席数
14,967	1,822	0.12

学生数は「大学構成調査票」(平成 27 年 5 月 1 日現在)による

（参考）

平成 27 年度学術情報基盤実態調査結果報告 1，2-1

総括事項，閲覧座席数

区分	閲覧座席数	学生数	学生あたりの閲覧座席数
（国立大学）			
A	39,767	299,757	0.13
B	13,236	120,587	0.11
C	16,556	124,317	0.13
D	8,641	66,141	0.13
計	78,200	610,802	0.13
1大学平均	909	7,102	0.13

区分A: 8学部以上 (19校)
区分B: 5～7学部 (16校)
区分C: 2～4学部 (26校)
区分D: 単科大学 (25校)

4.3. 収容冊数

本館および松戸分館が書架を増設し，収容冊数にして計 100,000 冊弱の増となった。

図書館名	棚板延長（m）	収容冊数（冊）
本　館	39,297	1,091,583
亥鼻分館	11,975	332,639
松戸分館	3,375	93,750
合　計	54,647	1,517,972

参考：平成25年度千葉大学附属図書館外部評価報告書

図書館名	棚板延長（m）	収容冊数（冊）
本　館	36,118	1,003,278
亥鼻分館	11,970	332,500
松戸分館	3,000	83,333
合　計	51,088	1,419,111

注）収容可能冊数は｛棚板延長（m）÷0.9×25｝の式により算出されている(1段に25冊)

4.4. 利用者用 PC 台数　　※数値はいずれも附属図書館内調査

教育用端末（統合情報センター管理。千葉大学所属者が利用可能なデスクトップ PC）を含め，3 館合計で 141 台を利用者用としている。内訳は以下のとおり。

本館貸出用端末は非常によく利用されており，平成 27 年度の利用は 9,500 回近くとなった。このため評価期間後の平成 28 年度はさらに 10 台を追加した。また教育用端末が設置されている本館 N 棟 3 階の席は試験期間中などたびたび満席となり，こちらも需要が多いことがわかる。

利用者用PC	本　館	亥鼻分館	松戸分館
教育用	50	—	—
貸出用	25	—	—
情報検索用	2	10	8
OPAC用	10	1	—
印刷用	1	1	—
CALL（語学学習用）	4	5	4
情報リテラシー教育用ノートPC	—	20	—
合計	92	37	12

本館貸出用端末（ノート PC，タブレット PC）貸出回数

月	平成25年度	平成26年度	平成27年度
4月	184	292	578
5月	490	549	992
6月	508	561	1,362
7月	648	764	1,680
8月	150	166	398
9月	46	47	89
10月	283	364	794
11月	342	336	896
12月	333	345	943
1月	452	559	1,042
2月	195	320	603
3月	30	42	72
合計	3,661	4,345	9,449

4.5. 業務システム

平成 27 年度末現在，図書館業務システムをはじめとした下記の各システムの運用を行っている。

■図書館業務システム

平成 23 年 6 月に更新し，NEC E-CatsLibrary の運用を開始した。サーバ機 4 台，バックアップ装置 1 台，端末機 73 台（うち業務用 53 台，情報検索用 20 台），プリンタ 15 台。

なお評価期間後の平成 28 年度に更新，引き続き E-CatsLibrary を運用している。

■授業資料ナビゲータ作成支援システム

平成 24 年 1 月に導入，サーバ機 1 台。

■レコピックシステム

平成 22 年に導入，平成 24 年 6 月に機器を増設。RFID による資料の利用頻度調査に使用（資料に IC タグを添付し計測）。管理 PC1 台，リーダライタ 5 台，アンテナ 40 枚。

■授業動画収録システム

平成 24 年 10 月に導入，平成 25 年 9 月に機器を増設。収録システム 3 台，カメラ 4 台，カメラ用コントローラー1 台。

■Moodle（LMS，ラーニング・マネジメント・システム）

平成 22 年度本学に Moodle が導入された。平成 25 年 8 月に機器更新，サーバ機 2 台，負荷分散装置 1 台。

■デジタルアーカイブシステム

平成 26 年 4 月に機器更新，サーバ機 1 台。

■学術成果リポジトリシステム

平成 23 年 6 月に機器更新，サーバ機 1 台。

5. 学術情報資源

5.1. 所蔵資料

蔵書冊数は，図書 139 万冊前後（本館 104 万冊，亥鼻分館 25 万冊，松戸分館 9 万冊）で安定している。図書受入と除籍冊数が均衡しており，適度な入替えが保たれている。
雑誌タイトル数も維持しており，購読継続が維持されている。

	本館	亥鼻分館	松戸分館	合計
平成25年度蔵書冊数	1,037,476	253,642	96,404	1,387,522
平成25年度図書受入冊数	8,385	2,368	631	11,384
雑誌所蔵タイトル数	15,136	5,490	3,563	24,189
雑誌受入タイトル数	3,109	1,185	438	4,732
新聞受入タイトル数	18	12	12	42
視聴覚資料タイトル数（CD,DVD,ビデオ）	2,885	896	323	4,104

	本館	亥鼻分館	松戸分館	合計
平成26年度蔵書冊数	1,041,709	254,303	95,674	1,391,686
平成26年度図書受入冊数	7,832	1,406	583	9,821
雑誌所蔵タイトル数	15,187	5,521	3,562	24,270
雑誌受入タイトル数	2,832	1,188	437	4,457
新聞受入タイトル数	18	12	12	42
視聴覚資料タイトル数（CD,DVD,ビデオ）	2,651	901	359	3,911

	本館	亥鼻分館	松戸分館	合計
平成27年度蔵書冊数	1,040,488	253,521	93,713	1,387,722
平成27年度図書受入冊数	8,550	1,195	659	10,404
雑誌所蔵タイトル数	15,690	5,717	3,986	25,393
雑誌受入タイトル数	3,101	948	559	4,608
新聞受入タイトル数	18	12	12	42
視聴覚資料タイトル数（CD,DVD,ビデオ）	2,681	970	432	4,083

新聞受入タイトル数は日本図書館協会「日本の図書館」調査提出データによる

5.2. 電子資料

※利用可能な電子ジャーナル・電子ブックタイトル数を除く数値はいずれも附属図書館内調査

電子ジャーナルの契約はパッケージを中心に約22,000タイトルで維持されている。電子ブックについても，買い切り型のタイトルを中心に利用可能なタイトル数が増加している。

5.2.1. 電子ジャーナル・電子ブック

利用可能なタイトル数

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
電子ジャーナルタイトル数	21,934	22,480	22,775
電子ブックタイトル数	20,276	21,372	21,954

電子ジャーナル利用統計（平成 27 年 1 月～12 月）

タイトル	アクセス数
American Chemical Society (ACS)	104,276
American Physical Society	17,624
Annual Reviews	1,199
BioOne	1,082
Cambridge University Press (CUP)	2,406
EBSCOhost Academic Search Premier	15,102
IEEE(IEL)	13,268
Journal of the Physical Society of Japan (JPSJ)	1,378
JSTOR Arts & Sciences Ⅰ Collection	4,362
Nature Online (33タイトル)	90,628
Ovid	12,470
Oxford University Press	29,102
Project Euclid Prime Collection	131
ProQuest Health & Medical Complete	5,300
Rockefeller University Press	845
Royal Society of Chemistry	32,051
Sage	8,239
ScienceDirect	429,271
SpringerLink	67,653
Taylor & Francis	18,150
Wiley-Blackwell	122,128
CiNii（NII学術情報ナビゲータ）	445,676
情報処理学会サイトライセンスサービス	2,050
日経BP記事検索	19,805
メディカルオンライン	85,893

電子ブック利用統計（平成 27 年 1 月～12 月）

タイトル	アクセス数
Cambridge University Companions Online	51
EBSCO eBook Collection （旧 NetLibrary）	1,645
Maruzen eBook Library	3,453
Oxford Handbooks Online	155
Oxford Scholarship Online	35
Science Direct Book seris	957
Web 版ステッドマン医学大辞典	2,522

5.2.2. データベース

利用可能なデータベース数

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
全キャンパス共通	13	14	17
西千葉キャンパス限定	1	1	1
亥鼻キャンパス限定	2	2	2
松戸キャンパス限定	1	1	1
合計	17	18	21

データベース利用統計（平成 27 年 1 月～12 月）

タイトル	アクセス数	備考
CINAHL	40,457	
Cochrane Collection Plus	60,834	
EBSCOhost Academic Search Premier	24,724	
Europa World of Learning Online	統計提供なし	
Europa World Online	統計提供なし	
Gale Biography in Context	199	西千葉限定
Journal and Highly Cited Data (JHCD)	2,217	
LEX/DB	5,469	
LexisNexis at lexis.com	5,888	
Marquis Biographies Online	100	
MathSciNet	22,291	
MEDLINE	51,308	
MLA	37,050	
PsycINFO	31,003	
SciFinder(Academic)	136,561	
Scopus （平成27年3月末で契約終了）	統計提供なし	
Web of Science及び研究評価ツールInCites	31,563	
医中誌web	116,108	亥鼻限定
最新看護索引Web	統計提供なし	亥鼻限定
聞蔵Ⅱ 朝日新聞DB	2,369	
ジャパンナレッジ	61,433	
ブリタニカ・オンライン・ジャパン	4,815	
ヨミダス文書館	8,750	
ルーラル電子図書館	31,541	松戸限定

5.3. コレクション

本分館ともに，コレクションを所蔵し，貴重資料室に配架するとともに，一部はデジタル化を行っている。アダム・スミスコレクションについては，YouTube に本学教員による解説動画を掲載して，外部公開している。

文　庫　名	数　量	配架場所	由　来　等	内　　容	電子化
アダム・スミスコレクション	34点	本　館	法経学部の収集書「アダム・スミスコレクション解題目録」平成9年刊	アダム・スミスの著書を中心にイギリス経済学関係の貴重図書	解説動画
郭沫若記念文庫	約3,000冊	本　館	郭沫若氏（中国科学院長）の寄贈書	「四部叢刊」，「百衲本二十四史」，「説文解字詁林」等	
小池文庫	約7,600点	本　館	小池新二教授の旧蔵書「小池文庫目録」昭和61年刊	工業デザインを中心に，芸術，建築，社会，地誌，民俗，文学などの関連資料雑誌，パンフレットを多数含む	目録
佐久間文庫	約1,200冊	本　館	佐久間政一氏（旧制第二高等学校教授）の旧蔵書	ドイツ語学を中心にドイツ文学，芸術関係図書	
竹田文庫	488点	本　館	竹田厚太郎教授の旧蔵書	ドイツ語図書を中心とするドイツ哲学関係資料	
田中（康一）文庫	約2,400点	本　館	田中康一教授の寄贈書 田中完一氏の寄贈書	ドイツ語学，文学関係資料及び田中家所蔵の和漢書 古ドイツ語の音声記録の録音テープを含む	
田中（英明）文庫	1,040冊	本　館	田中英明教授の旧蔵書「田中文庫目録」昭和57年刊	経営学，経営管理関係図書	
手塚岸衛・自由教育文庫	67点	本　館	手塚岸衛氏の蔵書及び自由教育関連の諸資料	手塚岸衛氏の原稿と著作，千葉県師範学校関係の史資料等新聞切り抜き，写真を多く含む	
ハンガリー文庫	約770冊	本　館	大使館の寄贈書 文学部の収集書	ハンガリー関係資料	
ブルガリア文庫	約930冊	本　館	大使館の寄贈書 文学部の収集書	ブルガリア関係資料	
町野家文庫	約700点	本　館	町野久衛氏の寄託資料 昭和44年作成の 目録(コピー)有り	千葉郡犢橋村（現千葉市花見川区犢橋町）旧名主の町野家所蔵の江戸期の古文書。貢租資料，宗門人別帳，訴訟記録等諸般にわたる。	
ユーラシア（徳永）文庫	図書約3000冊、雑誌27タイトル	本　館	東京外国語大学名誉教授、徳永康元氏（言語学、ハンガリー文学、1912～2003年）の膨大な蔵書の一部が金子亨本学名誉教授を経て寄贈された。	古書通、愛書家として知られ多趣味でもあった氏の蔵書内容は、文学、言語学、民族学、音楽、演劇等多岐にわたり貴重な資料が多い。	
吉武文庫	約3,000点	本　館	吉武好孝教授の旧蔵書	英米文学を中心に，文体論，文章論関係資料，明治初期の翻訳文学書を数多く含む	
亘理文庫	訳600点	本　館	亘理俊次教授の寄贈書	兵法，道徳，儒学，教育勅語関係	

文　庫　名	数　量	配架場所	由　来　等	内　　容	電子化
古医書コレクション（東洋医学古書コレクション）	約5,500点	亥鼻分館	伊藤弥恵治教授の寄贈書 千葉弥次馬氏の寄贈書 佐倉順天堂旧蔵書 三宅しづ氏の寄贈書 等 「千葉大学附属図書館亥鼻分館古医書コレクション目録」2007年刊	明治以前の和漢医書・本草書ならびに西洋医学書，更に一般歴史に関する図書も少なくない。「重訂・解体新書」「蘭学事始」「蔵志」「麻嶋流眼科秘伝」等 の貴重書を含む	画像（190点）
江戸・明治期園芸書コレクション	約70点	松戸分館	前身の千葉高等園芸学校設立（明治期）以来の収集品 故岩佐亮二名誉教授の収集品	江戸期以来の我が国の園芸の変遷，発展をたどる上で重要な彩色図譜，園芸書	画像（18点）
小寺文庫	約7,500点	松戸分館	小寺駿吉教授の旧蔵書 「小寺文庫目録」昭和62年刊	造園学，造園史関係資料内外の地誌関係資料や公園緑地関係の図面を数多く含む	目録

（電子化点数は平成 27 年度末現在）

6. サービス

6.1. 利用対象者

学生数

	人数
学部・大学院学生	14,277
聴講生等	502
合計	14,779

教職員数

	専任	非常勤その他	合計
教員	1,173	1,189	2,362
職員	1,815	1,641	3,456
合計	2,988	2,830	5,818

大学構成調査票（平成 27 年 5 月 1 日現在）による

本・分館別奉仕対象数

	本　館	亥鼻分館	松戸分館	合　計
学生	11,053	2,509	1,217	14,779
教職員	2,256	3,340	222	5,818
合計	13,309	5,849	1,439	20,597

平成 27 年度日本図書館協会「日本の図書館」調査提出データによる

6.2. 開館時間

授業期間・試験期間・休業期間に区分し，試験期間の開館時間を延長している。本館において平成 25 年度の前期試験期間，後期の授業期間・試験期間に 8:30 開館を試行し，平成 26 年度から本実施している。

総開館時間(平成 27 年度)

	開館総時間数	うち時間外開館時間数
本　館	3,345	1,449
亥鼻分館	8,780	6,919
松戸分館	2,772	904

開館時間（平成 27 年度）

		本　館	亥鼻分館	松戸分館
授業期間	平日	8:30-21:45	9:00-21:45	9:00-21:00
	土日	10:30-18:00	10:30-20:00	12:30-16:30
	祝日	10:30-18:00	10:30-20:00	閉館
試験期間	平日	8:30-23:00	9:00-21:45	9:00-21:00
	土日	10:30-20:00	10:30-20:00	12:30-16:30
	祝日	10:30-20:00	10:30-20:00	閉館
休業期間	平日	9:00-16:45	9:00-16:45	9:00-16:50
	土日	閉館	閉館	閉館
	祝日	閉館	閉館	閉館

※亥鼻分館では，特別利用により教員および大学院生については 24 時間利用が可能

6.3. 利用実績

6.3.1. 入館者数

本館では，改築・整備の効果があり，入館者数が増加している。特に平成 27 年 7 月には 1 か月の入館者数としては過去最高の 91,602 名を記録した。

本館が一部改修中であった平成 25 年度には，本分館相互に補完しつつサービスをおこなっており，亥鼻分館の入館者数が多い。亥鼻分館，松戸分館ともに，アクティブ・ラーニング空間の整備などの館内整備に努め，平成 27 年度は前年度と比較して入館者数は回復している。

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
本　館	516,765	528,978	579,361
亥鼻分館	61,015	54,944	56,539
松戸分館	34,815	32,118	33,170
合　計	612,595	616,040	669,070

日本図書館協会「日本の図書館」調査提出データによる

6.3.2. 貸出冊数

貸出冊数は一定しており，安定した利用がみられる。学生 1 人あたりの貸出冊数は全国平均と比較すると少ないが，一方で入館者数が増加していることを勘案すると，図書館に求められる機能が変質しつつあることがうかがえる。

本・分館別貸出冊数

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
本　館	106,275	104,388	105,082
亥鼻分館	15,096	14,790	15,806
松戸分館	5,076	4,637	4,815
合　計	126,447	123,815	125,703

学生貸出冊数

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
本　館	96,806	95,182	94,628
亥鼻分館	13,282	13,027	13,812
松戸分館	4,840	4,413	4,480
合　計	114,928	112,622	112,920

学生 1 人あたりの貸出冊数

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
千葉大学（本分館合計冊数／学生数）	7.9	7.9	7.9
国立大学全体	10.5	10.6	未集計
国立大学区分A	12.0	12.1	未集計

[区分 A は 8 学部以上の規模]

（参考）本学の学生数の推移

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
学部・大学院合計	14,481	14,335	14,277

「大学構成調査票」による（聴講生等数を除く）

6.3.3. 文献複写・現物貸借件数

文献複写は依頼・受付ともに減少傾向であるが，看護学文献を所蔵している亥鼻分館では，他大学からの文献提供受付が依然として多い。現物貸借については，本館の改修の影響により，平成 25・26 年度は借受が多く，貸出が少ない。

6.3.3.1. 文献複写

文献複写 依頼	平成25年度	平成26年度	平成27年度
本　館	2,441	2,479	1,777
亥鼻分館	2,518	2,059	2,123
松戸分館	225	263	130
合　計	5,184	4,801	4,030

文献複写 受付	平成25年度	平成26年度	平成27年度
本　館	1,016	1,094	1,662
亥鼻分館	5,116	4,627	4,041
松戸分館	518	370	265
合　計	6,650	6,091	5,968

6.3.3.2. 現物貸借

現物貸借 借受	平成25年度	平成26年度	平成27年度
本　館	1,018	1,002	837
亥鼻分館	99	67	95
松戸分館	37	85	55
合　計	1,154	1,154	987

現物貸借 貸出	平成25年度	平成26年度	平成27年度
本　館	163	171	306
亥鼻分館	69	54	29
松戸分館	32	29	10
合　計	264	254	345

6.3.4. レファレンス件数

カウンターでの質問に応じるクイックレファレンスのほか，本館においては，N 棟 2 階の学習スペースの中にレファレンス・デスクを設置し，平日午後の 3 時間，職員が常駐して対応している。

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
本　館	6,103	5,750	6,221
亥鼻分館	1,749	1,852	1,841
松戸分館	1,114	1,122	1,205
合　計	8,966	8,724	9,267

6.3.5. 情報リテラシー教育　　※数値はいずれも附属図書館内調査

アカデミック・リンクの人的支援活動として，ガイダンス・情報リテラシー教育を積極的に行っており，参加人数が増加している。図書館主催で行う，新入生ライブラリーツアー，各種データベース利用講習会のほか，各学部学科・グループ別講習会，普遍教育「情報処理」授業支援等の授業連携ガイダンスも実施している。また，対面のガイダンスだけではなく，データベース等のツールについて，情報の探し方や使い方を解説したインフォメーションシートの作成，配布も行っている。

開催回数

		平成25年度	平成26年度	平成27年度
本　館	総　数	113	101	106
	(内 授業連携)	(73)	(71)	(76)
亥鼻分館	総　数	30	18	26
	(内 授業連携)	(27)	(18)	(17)
松戸分館	総　数	4	2	6
	(内 授業連携)	(3)	(2)	(6)
合　計	総　数	147	121	138
	(内 授業連携)	(103)	(91)	(99)

参加人数

		平成25年度	平成26年度	平成27年度
本　館	総　数	4,218	4,431	4,509
	(内 授業連携)	(3,845)	(4,006)	(4,088)
亥鼻分館	総　数	713	608	675
	(内 授業連携)	(649)	(608)	(596)
松戸分館	総　数	369	320	422
	(内 授業連携)	(358)	(320)	(422)
合　計	総　数	5,300	5,359	5,606
	(内 授業連携)	(4,852)	(4,934)	(5,106)

上段はガイダンスの総数，下段(（　）書き)は授業連携ガイダンスの内数

授業連携ガイダンスは，各学部学科・グループ別講習会，普遍教育「情報処理」授業支援，図書館学関連授業に対する支援を含む

6.4. 留学生サービス　　※蔵書，ガイダンス数値はいずれも附属図書館内調査

本学には平成27年度で1,443名の留学生を受け入れている。留学生コーナーに図書を配置するほか，留学生対象に日本語・英語両方でガイダンスを行っている。

留学生数内訳

学部生	修士	博士	研究生	特別研究生	特別聴講学生	科目等履修生	専攻生	予備教育生	合計
194	226	298	124	25	509	23	30	14	1,443

（大学概要 2016 に掲載の平成 27 年度外国人学生数）

留学生用コーナー蔵書冊数

	本館	亥鼻分館	松戸分館	合計
平成27年3月末	3,879	1,244	1,689	6,812

留学生ガイダンス

平成 25 年度

実施日	回数	使用言語	参加者数	内容
4月19日　本館	1	英語	2	図書館サービス案内，館内見学ツアー
10月4日　本館	2	英語1，日本語1	45	館内見学ツアー
10月11日　亥鼻分館	1	英語	1	文献検索演習，文献管理法
10月24日　本館	1	日本語	10	蔵書検索，日本語論文検索ほか

平成 26 年度

実施日	回数	使用言語	参加者数	内容
4月18日　本館	1	英語	7	図書館サービス案内，館内見学ツアー
10月4日　本館	2	英語1，日本語1	49	館内見学ツアー
10月10日　亥鼻分館	1	英語	1	文献検索演習，文献管理法
10月23日　本館	1	日本語	24	蔵書検索，日本語論文検索ほか

平成 27 年度

実施日	回数	使用言語	参加者数	内容
4月9日　本館	1	英語	7	図書館サービス案内，館内見学ツアー
10月2日　本館	2	英語1，日本語1	42	図書館サービス案内，館内見学ツアー
10月22日　本館	1	日本語	21	蔵書検索，日本語論文検索ほか

6.5. ウェブサービス　※数値はいずれも附属図書館内調査

6.5.1. 千葉大学蔵書検索（OPAC）・MyLibrary

OPAC (Online Public Access Catalog) では千葉大学附属図書館の蔵書検索に加え，図書の所蔵状況，貸出状況の確認ができる。また，図書館サービスをウェブ上で提供しているMyLibrary の機能では，自分自身の貸出・予約状況確認のほか，借用中の図書の更新手続き（返却期限延長）をオンラインで行うことができる。また，文献複写・現物貸借もオンラインで申し込みでき，申し込んだ文献複写や借用の進捗状況も確認可能である。

OPAC 利用状況

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
簡易検索回数	222,986	211,744	200,453
詳細検索回数	695,480	770,574	750,204
検索回数（再検索回数も含む）	1,046,697	1,137,164	1,171,143

簡易検索回数は，検索窓が1つだけの検索画面を利用した回数である。

詳細検索回数は，検索項目を複数組み合わせて検索できる検索画面を利用した回数である。初期画面は詳細検索画面に設定されている。

検索回数は，再検索の回数を含むため，簡易検索回数と詳細検索回数の合計とは一致しない。

MyLibrary 利用状況

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
貸出・予約状況照会	20,636	20,465	21,695
文献複写・貸借申し込み	9,404	9,032	8,160
文献複写・貸借申し込み状況照会	5,237	5,512	4,229
予約取り寄せ	5,461	5,489	5,535

6.5.2. ＠千葉大リンクサービス（リンクリゾルバ）

＠千葉大リンクサービスは，ウェブ上で見つけた文献情報を入手するためのサービスであり，データベースによっては，千葉大のネットワーク内から検索した際に下記のアイコンが表示され，アイコンをクリックすると電子ジャーナル，蔵書検索などへつなぐ，ナビゲーションウィンドウが開く。このサービスの開始以前は，データベースの検索結果を参照して，改めて蔵書検索や電子ジャーナルのタイトルリストの検索等の手間が必要であったが，このサービスによってデータベースの検索結果から直接論文本文にアクセスしたり，MyLibrary にログインして申し込むことができる。

「＠千葉大リンクサービス」アイコン

7. 情報発信・広報

7.1. ウェブによる広報

千葉大学附属図書館では，工学部電気電子工学研究科池田研究室の協力により千葉大学附属図書館情報検索システム（CULIS）を構築し，平成 6 年 4 月に全国立大学図書館に先駆けてウェブサイトを開設した。以来，メニューを整備しつつ，図書館の情報発信とサービスの提供を行ってきている。

平成 24 年 4 月からの千葉大学におけるアカデミック・リンクに関する本格的なサービス提供に伴い，アカデミック・リンク・センターと共働する附属図書館のウェブサイトについて視認性の向上を図るため，デザインをリニューアルし，「探す」「使う」「知る」の 3 つのカテゴリーで情報発信を行っている。

7.1.1. 附属図書館ウェブサイト

URL：http://www.ll.chiba-u.jp/

■平成 26 年度

本館の利用案内について，PDF ファイルのリンクしかなかったものを HTML 化し，アクセシビリティの向上をはかった。

■平成 27 年度

利用案内のページに本館の館内案内図（日・英）を掲載した。

紹介状発行申込フォームのファイルをダウンロード可能にし，来館せずに申込ができるようにするなど，サービスの充実を図った。

7.1.2. Twitter, facebook ※数値は附属図書館内調査

平成 23 年度から，アカデミック・リンク・センターと共通のアカウントを用いて，図書館のイベントやお知らせについて，ウェブサイトよりもさらに詳細な情報を提供したり，台風接近時の臨時休館など各種情報の周知を行っている。

		平成25年度	平成26年度	平成27年度
Twitter	ツイート数	351	799	778
Facebook	投稿数	318	294	292

7.2. 学術成果リポジトリ

千葉大学学術成果リポジトリ（CURATOR）は，千葉大学において生み出された学術研究成果（学術論文，プレプリント，テクニカルレポート，学位論文，会議発表資料等）を電子的に保存し学内外に公開するインターネット上の発信拠点である。

千葉大学は日本で初めて機関リポジトリを構築し，「千葉医学会誌」等の論文誌や「萩庭さく葉標本」の画像データ等，さまざまなコンテンツが登録されている。

学術成果リポジトリの整備状況

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
コンテンツ件数（累計）	89,157	90,043	90,606
アクセス回数（／月）	107,657	109,571	124,225

中期目標期間の実施状況経年データ(企画総務部企画政策課提出)による

■平成 25 年度

・学位規則の改正に伴い，博士論文の組織的な登録を開始（平成 25 年 4 月）

・国立情報学研究所（NII）の E-Repository 用の共用リポジトリ JAIRO Cloud 移行のためのデータ抽出プログラム開発に協力（平成 25 年 8 月～26 年 8 月）

■平成 26 年度

・国立情報学研究所（NII）の共用リポジトリ JAIRO Cloud 移行実験に参加
（報告書 http://id.nii.ac.jp/1038/00000160/）（平成 26 年 5～10 月）

・ジャパンリンクセンター（JaLC）の研究データへの DOI 登録実験プロジェクトへ参加
（平成 26 年 10 月～27 年 9 月）

■平成 27 年度

・次期リポジトリシステムの検討を開始（平成 27 年 5 月）

・「千葉大学オープンアクセス方針」を教育研究評議会で承認（平成 28 年 3 月）

（参考）

平成 14～16 年度（計画から構築まで）

・学術情報発信強化に向けてリポジトリシステムの構築を計画し，プロトタイプ・システムの開発(平成 14 年度)

・「千葉大学学術成果リポジトリ運用指針」制定（平成 17 年 2 月図書館運営委員会）

・教育研究評議会にて承認，　運用開始（平成 17 年 2 月）

平成 17～24 年度（正式公開から評価システム構築まで）

・「千葉大学学術成果リポジトリ（CURATOR）」を正式公開（平成 17 年 7 月）

・平成 17～24 年度に，国立情報学研究所最先端学術情報基盤（CSI）次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業　学術機関リポジトリ構築連携支援事業を受託し，学内成果を電子化・公開やコミュニティの創出支援，機関リポジトリアウトプット評価システムの構築に取り組んだ。

・CURATOR　への取り組みにおいて平成 18 年度国立大学図書館協会賞を受賞（平成 18 年 3 月）

・学位論文の登録促進について，大学院教育委員会で承認（平成 21 年 12 月）

7.3. 図書館職員による研究教育発表等

職員が図書館の活動やアカデミック・リンク・センターの活動で実践した内容については，積極的に論文・口頭発表を行い，本学の取り組みで得られた成果の共有・情報発信に努めている。また，国内の研修会等にも講師を派遣し，図書館界の人材育成にも貢献している。

7.3.1. 論文・口頭発表

表題	掲載・発表先情報	発表年	著者・発表者	備考
国際連携活動の実際とノウハウ: DRFの活動を通して	大学図書館研究 98, p.40-50	2013	内島秀樹，杉田茂樹，鈴木雅子，西薗由依，土出郁子	千葉大所属: 杉田
「地域生活学研究」リニューアルへの祝辞	地域生活学研究 4, p.1-2	2013	杉田茂樹	
機関リポジトリ	大学図書館研究 100, p.29-37	2014	杉田茂樹	
平成25年度大学図書館シンポジウム「The University Library of the Future 大学図書館の未来」報告	大学図書館研究 100, p.104-109	2014	国公私立大学図書館協力委員会 シンポジウム企画・運営委員会	千葉大所属: 竹内，谷
電子化時代の大学教材（特集 電子化時代の資料アクセス）	図書館雑誌 108(10), p.680-681	2015	三角太郎	
大学学習資源コンソーシアム 学習・教育のための利用環境整備	情報管理 57(10), 725-733	2015	三角太郎	
PDA で変わる選書の未来：千葉大学・お茶の水女子大学・横浜国立大学三大学連携プロジェクトの取組み	情報の科学と技術 65(9), p.379-385	2015	立石亜紀子，餌取直子，庄司三千子	千葉大所属: 庄司
オープン・アクセス思潮の近年の展開	知能と情報 27(3), p.84	2015	杉田茂樹	
Students' behavior in library-based learning commons: the results of focus group interviews at Chiba University	The 6th international conference on Asia-pacific Library and Information Education and Practice 2015/11. p.358-366	2015	Naho Tani, Mariko Takeuchi, Yoriko Ikejiri, Rie Marumo, and Michiko Shoji, [Librarians] Chihiro Kunimoto, Yuji Shirakawa and Hiroya Takeuchi	
大学図書館における多彩な空間利用	[千葉市図書館情報ネットワーク協議会]Network通信　No.45合併号, p.31-32	2015	中原由美子	
第86回日本医学図書館協会総会分科会B「究極のディスプレイ術を学ぶ」参加報告	医学図書館 62(4), p.257-260	2015	武内八重子	
学術情報流通の逆転（小特集 機関リポジトリのこれから）	大学図書館研究 103, p.1-8	2016	杉田茂樹	
北米の大学図書館におけるニーズ調査とシーズ提供の方策の調査	大学図書館研究 103, p.62-73	2016	谷奈穂，嶋田晋	千葉大所属: 谷

7.3.2. 講師派遣

平成 25 年度

研修等名称（主催）	開催地	講師等担当者	日程
第5回中国・四国・九州・沖縄地区大学図書館職員フレッシュパーソンセミナー（国立大学図書館協会）	広島大学	杉田茂樹	平成25年9月12日
平成25年度大学図書館職員短期研修（京都大学附属図書館・東京大学附属図書館）	京都大学・東京大学	杉田茂樹	平成25年10月3日・11月7日
デジタルリポジトリ連合第10回全国ワークショップ	パシフィコ横浜	杉田茂樹	平成25年10月29日
平成25年度第2回JAIRO Cloud講習会（国立情報学研究所）	金城学院大学	武内八重子	平成25年11月27日
第5回 SPARC Japan セミナー平成25（国立情報学研究所）	国立情報学研究所	杉田茂樹	平成26年2月7日
平成25年度国立大学図書館協会教育学習支援検討特別委員会事例報告	筑波大学東京キャンパス文京校舎	庄司三千子	平成26年2月12日
国立大学図書館協会東京地区協会大学図書館職員研修	お茶の水女子大学附属図書館	谷奈穂	平成26年2月19日

平成 26 年度

研修等名称	開催地	講師等担当者	日程
学術情報基盤オープンフォーラム2014（国立情報学研究所）	国立情報学研究所	杉田茂樹	平成26年5月29日
目録システム講習会（国立情報学研究所）	国立情報学研究所	木下　直	平成26年6月18日～20日
三大学連携 機関リポジトリ研修会	お茶の水女子大学	杉田茂樹・三角太郎・武内八重子・谷奈穂	平成26年8月5日
平成26年度大学図書館職員短期研修（京都大学附属図書館・東京大学附属図書館）	京都大学・東京大学	杉田茂樹	平成26年10月9日・11月13日
オープンアクセス・サミット2014（国立情報学研究所）	学術総合センター	三角太郎	平成26年10月22日
第100回全国図書館大会第5分科会大学図書館（日本図書館協会）	明治大学駿河台キャンパス	三角太郎	平成26年11月1日
第16回図書館総合展フォーラム 大学の知の発信システムの構築に向けて（機関リポジトリ推進委員会）	パシフィコ横浜	杉田茂樹・三角太郎	平成26年11月6日
静岡県大学図書館協議会講演会	静岡大学	杉田茂樹	平成26年12月5日
東海地区大学図書館協議会研修会	愛知県図書館	杉田茂樹	平成26年12月19日
France／Japan joint Meeting on Open Access（在日フランス大使館）	在日フランス大使館	三角太郎	平成27年1月28日
平成26年度国立大学図書館協会シンポジウム	名古屋大学附属図書館	谷奈穂	平成27年1月28日
平成26年度第5回JAIRO Cloud講習会（国立情報学研究所）	国立情報学研究所	武内八重子	平成27年2月2日
千葉市図書館情報ネットワーク協議会平成26年度第2回研修会	千葉大学附属図書館本館	中原由美子	平成27年2月6日
機関リポジトリ新任担当者研修（機関リポジトリ推進委員会）	東北学院大学・岡山大学	三角太郎・杉田茂樹	平成27年2月20日・27日
平成26年度JAIRO Cloud講習会（国立情報学研究所）	山形大学小白川図書館	三角太郎	平成27年3月6日
科学情報学研究会（2014年度名古屋大学地球環境研究所・研究集会）	東京理科大学森戸記念館	三角太郎	平成27年3月25日

平成 27 年度

研修等名称	開催地	講師等担当者	日程
学術情報基盤オープンフォーラム2015（国立情報学研究所）	国立情報学研究所	杉田茂樹・三角太郎	平成27年6月11日～12日
第62回国立大学図書館協会総会海外派遣事業参加報告	ホテルニューオータニ熊本	谷奈穂	平成27年6月18日
ジャパンリンクセンター 研究データへのDOI登録実験プロジェクト中間報告会（JaLC: Japan Link Center）	科学技術振興機構 東京本部 別館	三角太郎	平成27年7月3日
機関リポジトリ新任担当者研修（国立情報学研究所）	大同大学・国立情報学研究所	杉田茂樹・塩田知也	平成27年7月23日・10月1日
第11回学術情報ソリューションセミナー2015（九州大学附属図書館・株式会社サンメディア）	九州大学附属図書館	三角太郎	平成27年7月31日
平成27年度大学図書館職員短期研修（京都大学附属図書館・東京大学附属図書館）	京都大学・国立情報学研究所	杉田茂樹	平成27年10月8日・12月3日
CODATAジャパン・データサイテーション・ワークショップ（科学技術データ委員会）	国立情報学研究所	三角太郎	平成27年10月29日
第17回 図書館総合展フォーラム 機関リポジトリの近未来:オープンアクセスからオープンサイエンスへ（機関リポジトリ推進委員会）	パシフィコ横浜	杉田茂樹・三角太郎	平成27年11月11日
平成27年度JUSTICE総会報告（大学図書館コンソーシアム連合）	明治大学駿河台キャンパスグローバルフロント	庄司三千子	平成28年3月2日
研究データとオープンサイエンスフォーラム（国立国会図書館）	国立国会図書館	三角太郎	平成28年3月17日

8. アカデミック・リンク・プロジェクト

アカデミック・リンクの概念に基づく新しい学習環境を提供するため，平成 24 年度に引き続き，平成 25 年度から 26 年度は 7 つのプロジェクトを実施した。各プロジェクトの企画，運営，分析など様々な段階でアカデミック・リンク・センターの教員と図書館職員が協働している。平成 27 年度からはプロジェクトを大きく 3 つのグループに再編し，引き続き教員と職員が協働してプロジェクトを実施している。以下は，平成 27 年度のプロジェクトの区分に従って 3 年分を記述する（各プロジェクトの詳細については，「アカデミック・リンク・センター評価委員会報告書」を参照のこと。）

8.1. コンテンツ形成（旧コンテンツ・ラボ）

8.1.1. 授業資料ナビゲータ

「授業資料ナビゲータ」とは，普遍教育の教養コア科目・教養展開科目などで，授業を担当する教員と図書館職員が，その授業の内容にあわせて共同作成した参考文献やウェブ情報のリスト（パスファインダー）であり，紙での配布とウェブ上での公開を行っている。「授業資料ナビゲータ」に掲載された図書は，本館 N 棟 2 階ブックツリーの授業資料ナビコーナーに「貸出可」と「館内利用」の 2 冊を用意している．このコーナーの棚は，RFID が設置された棚となっており，資料の取り出し状況を計測することができ，継続的に調査を行っている。

8.1.2. 動画の収録・配信（授業，セミナー等）

平成 24 年度の試行を経て，平成 25 年度から平成 27 年度の期間に本格的に実施した。内容としては，授業そのものを収録した授業動画，授業担当教員による授業紹介のためのショート動画である授業紹介動画，授業で出題した演習の解説や授業で扱わない応用的な内容に関する説明を収録した授業解説動画，1210 あかりんアワー講演動画，アカデミック・リンク・セミナーやシンポジウムの講演動画である。アカデミック・リンク・セミナーとシンポジウムの動画はアカデミック・リンク・センターのウェブサイトにおいて公開されている。

8.1.3. 全学及び各部局 FD の e ラーニング化

千葉大学における FD(Faculty Development)活動は，現在は高等教育研究機構 FD 推進部内で，企画立案が行われており，FD 推進部内と連携し，収録などの協力を行っている。

8.1.4. ALSA－TT の運営

ALSA-TT（Academic Link Student Assistant-Technical Team）は，本学の SA（Student Assistant）制度を元に，アカデミック・リンク・センターが雇用・運営する学生スタッフ組織のことである。ALSA-TT は，技術支援体制構築のために組織される。メンバーの多くは，動画収録の経験がある者又は習得に興味がある者であり，PC に詳しい学生も多数在籍している。業務としては，学生による技術支援である PC サポートデスク，貸出用端末のセットアップやメンテナン

ス，動画収録を担当している。

8.1.5. 物理演習問題集の電子化

多様な形態での教材の提供を目的として，物理演習問題の電子化及び Moodle による提供を行っている。「力学」「電磁気学」「数学基礎（物理数学）」を中心に進めている。

8.1.6. 基盤整備／Moodle

千葉大学では全学で利用する Learning Management System（LMS）としてオープンソースソフトウェアの Moodle を採用し，授業時間以外も含めた学習活動の支援を行っている。対面授業に加えての LMS の導入は，授業外学習の促進において不可欠となりつつある。Moodle のサポートでは，主に電子メールでの相談対応を行っているが，それ以外にも，アカデミック・リンク・センターI 棟 2 階にある「コンテンツ制作室」にて対面での相談対応を行っている他，マニュアルの作成も行っている。

8.1.7. コンテンツ制作室・PC サポートデスクの運営

アカデミック・リンク・センターI 棟のコンテンツ制作室は，教材の作成，課題の作成，課外活動等にあたって動画や画像などマルチメディアコンテンツの制作に適した環境・機材が整備されている。PC サポートデスクは教育用端末が並ぶ N 棟 3 階のグループワークエリアの一角で，コンピュータの利用に関する技術支援を目的として開設している。8.1.4.で前述のとおり，ALSA-TT が相談を受けている。

8.1.8. 児童文学事典の電子的再生（平成 25 年度で終了）

旧プロジェクト区分であった「レガシーコンテンツ再生」の一つの事例として『児童文学事典』（日本児童文学学会編，1988 年，東京書籍）の電子的な再生を行った。初版から 20 年余り経過していることもあり，本事典の電子化とあわせ改訂作業も進めた。その準備のために，出版社である東京書籍と日本児童文学学会の間で，本事典の電子化について覚書を取り交わし，学会側の判断で電子化を進めることが可能となる合意を得ている。完成したものを平成 26 年 1 月に『児童文学事典』電子版のページ（http://alc.chiba-u.jp/cl）で公開した。

8.1.9. デジタルコースパックのための著作権処理

著作権処理の事例蓄積を目的として，LMS を通じた授業外学習教材の提供のための使用許諾取得を行っている。著作権処理にあたって，以下のような作業上の問題点が明らかとなった。第一に，学会・出版社によって権利者が著者と学会・出版社の間で不分明であり，許諾申請者（この場合千葉大学）の問い合わせに対して明確な対処をできない場合があること。第二に，権利の所在が明らかになっている場合であっても，許諾が得られることが期待されるにもかかわらず実際には不可能である場合があること。第三に，一つの授業あたりの，上記のような使用許諾申請の作業量が非常に大きなものとなること，の 3 点である。あわせて「教材共有環境

の構築」についても検討したが，これらのプロジェクトについては，平成 26 年 5 月に設立された電子情報環境下における著作物の利用環境整備を検討する「大学学習資源コンソーシアム」に移行された。

8.1.10. デジタルコースパックの POD による提供の実験的試行（平成 26 年 6 月で終了）

電子化された授業教材は，パーソナルコンピュータやタブレット端末を通してアクセスできるが，一方で，紙媒体での教材も，一覧性の優位さや書き込みが容易等の長所があり，一定数の需要が想定される。多様な形態での教材提供というコンセプトのもと，POD （Print on Demand）システムを導入し，電子化された教材を紙媒体で提供する実験的な試行を実施した。

8.2. 人的支援（旧ティーチング・ハブ）

8.2.1. ALSA－LS による分野別学習相談

学習相談を中心とする学習支援を担当する Student Assistant を，ALSA-LS（Learning Support）と称している。学生の自律的学習者としての成長を促すアカデミック・リンクの諸プロジェクトの一環であり，さらにコンテンツの利用やさまざまな学習支援の選択肢と組み合わせることにより，学習環境のさらなる充実を期して行われるものである。

ALSA-LS による学習相談の基本方針は下記のとおりである。

（1） 教室や学習室などの個室ではなく図書館施設内のオープンな場所で行う

（2） 自然科学分野の数学・物理・化学と文系分野の「レポートの書き方」の4分野を置く

（3） 各分野を専門とする大学院生が ALSA-LS として学習相談を受ける

（4） 学生相談室等との協力体制を整備し，学習相談を超えた学生支援を可能とする

（5） 学習相談の記録用紙，利用者アンケート，業務日誌等を整備して情報を蓄積することでシステムの改善を図る

（6） ALSA-LS は事前研修・事後研修（振り返り）に参加し，支援者としての気づきやシステムの課題と改善を全体で共有する

を基本的な実施方針として取り組むこととした。これらのうち(5)と(6)は，ALSA-LS が学習相談を受けて質問に対応する受動的存在ではなく，相談者の学習過程を共有する支援者であり，そのことを通じて自分自身の成長とシステムの運営と改善にも参加する役割をもつ自律的な存在と位置づけたために実施したことである。これらの PDCA サイクルによって，絶えず課題の明確化と改善を行うことを可能としている。

8.2.2. ALSA-LS によるセミナー企画

レポート作成セミナーにおいては，ALSA-LS により構成・作成・講演が行われるほか，ALSA-LS 自身による相互評価・構成の改訂や新規企画の提案・作成等の改善が行われている。

8.2.3. 1210 あかりんアワー

平成 24 年 4 月より，「1210 あかりんアワー」（以下，あかりんアワー）を実施している。あかりんアワーは，千葉大学の学生と教職員の距離を縮めることを目的に実施しているショートセミナーである。12 時 10 分から 40 分までの 30 分間を利用して開催している。この名称は，開始時間とアカデミック・リンク・センターのマスコットキャラクタである「あかりん」に由来する。

火曜日は「教員が研究の楽しさを語る」を開催し，金曜日は様々なシリーズを開催している。今までに開催したシリーズとしては，「外国に暮らす」，「ALSA カフェ」，「千葉大学で〇〇するには？」などのシリーズがあるほか，他機関からの講師を招くなどの単体での企画を毎週行っている。「教員が研究の楽しさを語る」では，登壇者に紹介する図書・資料を 3～5 点ほど推薦してもらい，資料の推薦文をあわせて掲載したブックガイド（A4 サイズ 1 枚）を作成して参加者に配布している。さらに，推薦された資料とブックガイドは，附属図書館 N 棟 3 階ブックツリーに専用コーナーを設け，（平成 26 年 10 月からは L 棟 2 階ブックハウスにコーナーの場所を移動して）展示している。

8.2.4. 情報リテラシースキル養成活動

情報リテラシースキル養成活動は，必要な情報を収集し使いこなす技術の獲得を支援する活動である。これらの養成活動の開催方法や内容は多岐に渡り，図書館主催ガイダンスである館内ツアー，利用案内，各種データベース講習会などがあるほか，教員からの申込による学部学科グループ別ガイダンス，普遍教育「情報処理」授業支援，図書館学関連授業支援などを実施した。また大学院生（ALSA-LS）と図書館職員が協同でレポート作成セミナーを複数回実施した。

8.2.5. アクティブ・ラーニング・スペースにおける学習支援活動（レファレンス・デスク，オフィスアワー@AL）

教員によるオフィスアワー@AL，大学院生（ALSA-LS）による学習支援デスク，図書館職員によるレファレンス・デスクの 3 つを N 棟 2 階に設置して実践することにより，教員，学生，図書館職員が協働して学生の学習をサポートする取り組みを平成 24 年度の開設以来，継続的に行っている。

8.2.6. ALSA-GS によるアカデミック・リンク及び附属図書館の各種業務支援

本館でのアカデミック・リンク及び附属図書館の各種活動の支援を担当する Student Assistant として，ALSA-GS（General Support）を公募し，各種ガイダンス等の業務支援，企画，附属図書館本館内での図書館業務の補助・支援等の業務を行っている。

8.3. 空間整備・評価（旧アクティブ・ラーニング・スペース）

8.3.1. 千葉大学学習状況・情報利用環境調査（平成 23 年度～平成 27 年度実施）

アカデミック・リンクおよび千葉大学の学習環境を整備するために，千葉大学学部学生の日常的な学習環境・学習行動・生活時間・情報利用に関する基礎データを得ることを目的とするものである。そのデータを用いて，千葉大学内および学生生活全般において，アカデミック・リンクのもつ意味や位置づけを相対的・継続的に検証する。調査は，アカデミック・リンク・センター設置後，継続的に定点観測調査として実施する計画である。計画に沿って，平成 23 年度以降，毎年調査を実施している。

8.3.2. ID を共通記号化したうえでの各種調査の結果と学生成績情報の連動分析

毎年度定点観測的に実施している「千葉大学学習状況・情報利用環境調査」の内容と，学生の成績情報とを接合し，分析することにより，アカデミック・リンクの各種取組が学生の「学習」に及ぼした影響（アウトカム）の測定および経年変化の補足を目的として，実施した。平成 27 年度からは高等教育研究機構と共同で実施している。

8.3.3. 調査結果の実務への還元

研究成果を実際の「サービス改善」に活かす試みとして，平成 27 年度には，非常勤職員を含む図書館職員全員を対象に「ワークショップ：アカデミック・リンクの取組みから千葉大生について知る」を教員と職員で共同開催した。当該ワークショップでは，平成 24 年度～平成 26 年度までに実施した種々の活動について振り返ったうえで，そこから見えてくる千葉大生の学習実態やニーズについて情報を共有し，学生支援のために「図書館としてこれから何ができるか？」というテーマで議論・提案を試みた。提案内容の一部については図書館サービスとして実施した。

8.3.4. 分館におけるアクティブ・ラーニング支援環境の整備

アカデミック・リンクの全学への敷衍を目指し，亥鼻分館，松戸分館においてもアクティブ・ラーニング・スペースを設置した。（詳細は，11.2.亥鼻分館，11.3.松戸分館参照）

8.3.5. ブックハウスのコンセプト確立・整備

ブックハウスは，附属図書館本館Ｌ棟の改修に伴い設けられた空間である。平成 26 年 10 月のＬ棟リニューアルオープン以後，アカデミック・リンク・センターで開催しているショートセミナー「1210 あかりんアワー」や「授業資料ナビゲータ」で紹介された図書等，本学教員について知るきっかけとなる資料を配置してきたが，明確な運用方針は定められていなかった。平成 27 年度にあらためて検討を行い，現状をさらに発展させる方向で，教員の教育・研究や千葉大学に関する情報を広く発信し，関連するコンテンツを提供することで学生と教員・大学を結びつける，という点をコンセプトとすると定め，順次整備を行っている。

8.3.6. 定点カメラ映像など画像処理による利用状況・行動調査

本館N棟 2 階フロアにおける学生の利用状況を，学生達の通常の学習行動を阻害せず，可能なかぎり自然な状態で量的に「定点観測」することを目的に，①机の配置とその種類，②着席者の位置，③着席者の人数，④調査日時の4項目を収集する調査を平成 24 年度から 25 年度に実施した。

8.3.7. 学生に対するフォーカス・グループ・インタビュー調査

学習空間（アクティブ・ラーニング・スペース等）の評価を目的として，図書館改築前後（新旧）の学習環境を知る学部学生 22 名（2 年生以上）を対象に実施したグループ・インタビュー調査である。その結果から，学生の行う学習行動を 12 通りに分類し，学習行動を誘発する「環境の要素」を 3 種類導き出した。さらに，行動と環境の関連性を分析し，学生の行動の幅を制限しない空間設計や設備のポイントを何点か明らかにした。さらに調査結果からは，学生の学習行動が，他の学生の様子や，学生自身が「環境に抱くイメージ」によって影響されることも示唆された。本調査については，その分析の途中経過を平成 25 年 6 月，大学教育学会において発表した。平成 26 年度後半から平成 27 年度前半にかけては，その最終的な結果を論文化し，学術論文『図書館における学生の行動とその行動に関係する環境の要素: フォーカス・グループ・インタビューによる探索的調査』としてまとめた（誌面掲載は平成 28 年度）。

8.3.8. 学生撮影写真及び個人インタビューの併用によるフォトボイス調査

平成 25 年度に，整備した学習空間と学生の学習行動の関連性をより詳細に探ることを目的に，学年も専攻も多様な学部学生 9 名を対象に実施したフォト・インタビュー調査である。調査では，学生自身が撮影した「学習風景の写真」と「個人インタビュー」から，図書館内外での学習行動，空間や情報源の使い方，学習行動の動機などを問い，本調査を実施した。平成 26 年度から平成 27 年度にかけては，データ分析を行った。その結果，学生の学習内容は，課題や試験対策など，授業で課せられた（受動的な動機による）学習に留まらず，授業を基にした発展的な学習や進路を見据えた学習等，個々人の興味や関心を動機とした（より能動的な動機による）学習にまで，その内容が幅広く及ぶことが明らかとなった。また，学習空間の使い方や利用される情報源にも多様性が見られた。

8.3.9. ブックトラックを用いた図書利用状況調査

本館 N 棟 2 階および 3 階で館内資料（図書や雑誌）がこれらのエリアでどのように利用されたかのデータは，学生の資料の利用状況やラーニング・コモンズでの学習行動の分析において，必須の基礎データとなる。一般に，館内資料の利用分析は貸出統計をベースに行われているものの，どこでどのような館内資料が利用されたかは貸出統計からは把握することができない。そこで平成 24 年度から 25 年度にかけて，館内で利用された資料の返却用のブックトラックをN棟 2 階および 3 階に設置し，返却された館内資料を記録することで，館内資料がこれらのエリアでどのように利用されているかを明らかにした。

8.3.10. ビーコンを用いた図書館における学生行動軌跡調査

Bluetoothを用いた屋内測位システムの一種であるiBeaconとiPhoneを用いて，図書館内での学生の行動軌跡を明らかにすることを目的とした調査であり，平成27年度に実施した。ビーコンは本館の建物内約290箇所に設置した。iPhoneを持った学生が，専用アプリケーションを起動して，建物内に配置されている「ビーコン＝発信機」に近づくと，自動的に位置情報を記録する。収集したデータを館内マップ上で可視化したり，同時に実施したアンケートから得た属性別に分析するなどし，空間向上に資するレポート化を進めている。

8.4. 広報・成果普及

8.4.1. アカデミック・リンク・セミナー

セミナーの開催は，本プロジェクトの中心に位置づけられるものである。アカデミック・リンク・センターが千葉大学全学に対して，教育・学習の情報化に関する研修機会を提供するとともに，本センターの活動成果を広く社会全体に発信することを目的とする。平成27年11月からは，「アカデミック・リンク・セミナー／ALPSセミナー」として開催されている。アカデミック・リンク・セミナー以外にも，図書館関係の全国的フォーラム等に参加し，報告等も行っている。

8.5. ALPS（アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成）プログラム

アカデミック・リンク・センターは，平成27年7月に文部科学大臣から教育関係共同利用拠点「教職員の組織的な研修等の共同利用拠点（教育・学修支援専門職養成）」の認定を受け，教育・学修支援専門職養成を進めるために，ALPSプログラム（Academic Link Professional Staff Development Program for Educational and Learning Support）をスタートさせた。拠点認定に伴い，新たに「教育・学修支援専門職養成部門」を設置するとともに，同部門の運営及び活動に関する重要事項を調査審議する運営委員会を設置した。平成27年度の事業としては，「教育・学修支援の専門性に必要な能力項目・能力ルーブリック（試案）」を開発し，そのための基礎調査として文献調査，インタビュー調査，アンケート調査，訪問調査等を実施した。またキックオフシンポジウムと3回のセミナーを開催し，「ALPSブックレットシリーズ Vol.1」を発行配布し，大学における教育支援と学修支援の先駆的な取組や課題を幅広く紹介した。

9. 地域・社会連携

※数値はいずれも附属図書館内調査

9.1. 市民への公開

調査・研究等のために千葉大学附属図書館に所蔵する資料の利用希望者を対象に，各館のカウンターで氏名及び住所を確認して，公開している。入館者数にはオープン・キャンパス等の見学者数も含んでいる。なお，分館においては貸出は卒業生に限定している。

9.1.1. 入館者数

		平成25年度	平成26年度	平成27年度
登録者数	本館	995	880	863
	亥鼻分館	572	468	329
	松戸分館	19	2	3
	合計	1,586	1,350	1,195
入館者数	本館	27,033	22,580	24,043
	亥鼻分館	2,860	2,304	2,144
	松戸分館	311	211	180
	合計	30,204	25,095	26,367

9.1.2. 貸出冊数

		平成25年度	平成26年度	平成27年度
貸出冊数	本館	1,808	1,748	1,677
	亥鼻分館	41	48	51
	松戸分館	7	5	6
	合計	1,856	1,801	1,734

9.2. 高大連携

千葉大学では平成13年度から，千葉県内の高等学校と連携教育協定を締結し，本学で開講する授業の受講を認めている。附属図書館においても，本協定に基づく受講者を対象として図書館利用者カードを発行し，利用および図書の貸出を認めている。

開講年度	発行枚数
平成25年度	170
平成26年度	73
平成27年度	58

9.3. 千葉県内図書館との連携

9.3.1. 千葉県立図書館との相互協力件数

平成 22 年 7 月 1 日，「千葉県立図書館と千葉大学附属図書館との相互協力に関する協定」を締結し，千葉県立図書館 3 館と千葉大学附属図書館 3 館の間で県立図書館の搬送車による相互利用サービスを実施している。

分野を問わず，有効に利用されている。

	千葉県立図書館への貸出冊数			千葉県立図書館からの借用冊数		
	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
本館	27	17	41	212	280	223
亥鼻分館	40	26	6	15	17	32
松戸分館	16	5	0	21	46	28
合計	83	48	47	248	343	283

9.3.2. 千葉県大学図書館協議会

昭和 47 年 11 月全国図書館大会（日本図書館協会主催）が千葉県で開催されたことが発端である。昭和 59 年 11 月 20 日 第 19 回 千葉大学における開催から名称を「千葉県大学図書館協議会」と改めることとなった。毎年１回当番校において講演等を伴って会議を開催し，相互に連絡・協力することで互いの発展を図っている。

9.3.3. 千葉市図書館協議会

千葉市図書館の運営に関し館長の諮問に応ずるとともに，図書館の行う図書館奉仕につき，館長に対して意見を述べることを趣旨として，昭和 47 年に設置された。千葉市図書館からの委嘱を受け委員を派遣。平成 24 年から副委員長を務める。

9.3.4. 千葉市図書館情報ネットワーク協議会

千葉市内の各種図書館の相互協力を通じて，情報提供能力を強固にし，図書館サービスの向上を図ると共に，学術研究及び生涯学習の発展に寄与することを目的とし，平成６年１月設立。毎年度，千葉市生涯学習センターその他で開催される「加盟館紹介展」への出展や研修等に協力している。

9.3.5. アジア経済研究所図書館

平成 26 年 10 月 10 日，「国立大学法人千葉大学附属図書館及び独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所図書館の相互利用に関する覚書」を締結し，お互いの図書館をより便利に利用できるようにするとともに，年 1 回程度研究者にあかりんアワーへの登壇を依頼している。

アジア経済研究所図書館利用者カード申請書発行枚数

	発行枚数
平成26年度	13
平成27年度	23

10. 他機関図書館との連携

10.1. 国立大学図書館協会

国立大学図書館協会は，全国の国立大学，放送大学の附属図書館，及び4大学共同利用機関の図書館施設の，計 91（平成 27 年度現在）の大学・機関の図書館を会員とする組織で，会員間の緊密な連携と協力により，図書館機能の向上を支援するとともに，広く学術情報資源の相互利用の推進，学術情報流通基盤の発展に貢献し，もって大学の使命達成に寄与することを目的としている。協会は，国立大学図書館の機能向上に関し必要な調査研究，学術情報資源の共同整備と相互利用の促進，国立大学図書館職員の資質向上のための事業，及び学術情報流通に関する国内外の団体との連携・協力等の事業を行っている。

千葉大学附属図書館は，平成 27 年度に国立大学図書館協会の関東甲信越地区理事館を務め，以下の委員会に委員を派遣した。

・人材委員会人材育成小委員会（平成 25 年度）
・教育学習支援検討特別委員会（平成 25～27 年度）
・総務委員会ビジョン策定小委員会（平成 27 年度）

10.1.1. 国公私立大学図書館協力委員会専門委員会への委員の派遣

国公私立大学図書館協力委員会は，国立大学図書館協会，私立大学図書館協会，公立大学協会図書館協議会からなり，日本の大学図書館全体としての事業展開，課題解決，情報共有を行っている。

平成 25～27 年度には，千葉大学から，国公私立大学図書館協力委員会の以下に掲げる 3 つの専門委員会に，国立大学図書館協会からの指名で 3 名の委員を派遣して，国公私立大学附属図書館の様々な活動に貢献している。

・大学図書館シンポジウム企画・運営委員会
・大学図書館協力ニュース編集委員会
・大学図書館研究編集委員会

10.2. 千葉大学，お茶の水女子大学，横浜国立大学における図書館連携（三大学連携）

各大学の附属図書館の教育・研究支援機能の充実及び高度化に向け，単独大学では不可能な課題解決手法の開発・実施に取り組むことを目的に，平成 26 年 3 月 25 日，「千葉大学，お茶の水女子大学，横浜国立大学における図書館連携に関する申合せ」を締結し，その目的を達成するため三大学図書館間連携作業部会を設置した。部会は，次の各号に掲げる事項を検討している。

(1)アクティブ・ラーニング支援機能に関する事例共有及び手法開発に関すること。
(2)オープンアクセスに関する事例共有及び手法開発に関すること。
(3)電子資料の効率的な共同導入に関すること。
(4)紙媒体資料の効率的な共同保存（シェアード・プリント）に関すること。
(5)今後の効率的な図書館システムの在り方に関すること。
(6)本取組を通じた，各大学の附属図書館における人材の育成及び職能開発に関すること。
(7)その他申合せの1に規定する目的に合致した事項に関する調査，立案及び実施に関すること。

(3)については，丸善株式会社を取りまとめ役として平成 27 年 4 月から Patron-Driven Acquisition 方式による電子ブックの有償トライアルを実施した。この方式の導入は，国内では初めての事例であったため，その結果を雑誌論文や JUSTICE 総会において報告した。

10.3. 大学図書館と国立情報学研究所との連携・協力推進会議

国公私立大学図書館協力委員会と国立情報学研究所は，我が国の大学等の教育研究機関において不可欠な学術情報の確保と発信の一層の強化を図ることを目的として「大学共同利用機関法人情報・システム研究機構国立情報学研究所と国公私立大学図書館協力委員会との間における連携・協力の推進に関する協定書（以下，『協定書』）」を締結した。

大学図書館と国立情報学研究所との連携・協力推進会議は，『協定書』のもとに設置され，本目的を達成されるために，以下の事項について連携・協力を推進している。

(1)バックファイルを含む電子ジャーナル等の確保と恒久的なアクセス保証体制の整備
(2)機関リポジトリを通じた大学の知の発信システムの構築
(3)電子情報資源を含む総合目録データベースの強化
(4)学術情報の確保と発信に関する人材の交流と育成
(5)学術情報の確保と発信に関する国際連携の推進
(6)その他本目的を達成しうるために必要な事項

さらに，下部委員会として，以下の委員会を設置している。

・大学図書館コンソーシアム連合運営委員会
・機関リポジトリ推進委員会
・これからの学術情報システム構築検討委員会

10.3.1. 大学図書館コンソーシアム連合（JUSTICE：Japan Alliance of University Library Consortia for E-Resources）

大学図書館コンソーシアム連合は，日本の大学における教育・研究活動に必須である電子ジャーナルをはじめとした学術情報を，安定的・継続的に確保して提供するための活動を推進している。国立大学図書館協会コンソーシアムと公私立大学図書館コンソーシアムとのアライアンスによる新たなコンソーシアムとして，平成 23 年度に誕生した。

『協定書』の趣旨に沿って，「バックファイルを含む電子ジャーナル等の確保と恒久的なアクセス保証体制の整備」を推進することを主要な目的としている。

千葉大学附属図書館も設立当初から参加館となっており，作業部会に委員を派遣している。

10.3.2. 機関リポジトリ推進委員会

機関リポジトリ推進委員会は，『協定書』に掲げられた「機関リポジトリを通じた大学の知の発信システムの構築」に関する事項を企画・立案し，学術情報の円滑な流通及び発信力の強化にかかる活動を推進することを目的とし，平成 25 年度に設置された。

千葉大学附属図書館は設置当初から委員を派遣するほか，ワーキングに協力員を派遣し，活動に参画している。

10.3.3. これからの学術情報システム構築検討委員会

これからの学術情報システム構築検討委員会は，『協定書』に掲げられた「電子情報資源を含む総合目録データベースの強化」に関する事項を企画・立案し，学術情報資源の基盤構築，管理，共有および提供にかかる活動を推進することを目的として平成 24 年度に設置された。

千葉大学附属図書館からは作業部会に委員を派遣している。

10.4. その他

10.4.1. デジタルリポジトリ連合（DRF：Digital Repository Federation）

デジタルリポジトリ連合は，メーリングリストやウェブサイト，集合イベントなどでの情報共有，意見交換を通じ，国内における機関リポジトリの発展とオープンアクセス思潮の興隆につとめている。

千葉大学附属図書館は，DRF 設立当初から深く関わり，運営委員会やワーキンググループにメンバーを派遣し，その活動に関する協力体制を維持している。

10.4.2. ジャパンリンクセンター（JaLC：Japan Link Center）

ジャパンリンクセンターは平成 24 年に国際 DOI（Digital Object Identifier）財団から認定された DOI 登録機関である。国内の各機関が保有する電子的学術コンテンツの書誌・所在情報を一元的に管理し，DOI を登録するシステムを科学技術振興機構，物質・材料研究機構，国立情報学研究所，国立国会図書館の 4 機関が共同で運営している。

千葉大学附属図書館は，平成 26 年 9 月～27 年 12 月に実施された「研究データへの DOI 登録実験プロジェクト」に参加した。

10.付表

学外委員

委員会名称	氏名	委嘱期間
人材委員会（国立大学図書館協会）	島文子	平成23年4月1日～平成26年3月31日
教育学習支援特別委員会（国立大学図書館協会）	杉田茂樹	平成25年4月1日～平成28年3月31日
大学図書館シンポジウム企画・運営委員会（国公私立大学図書館協力委員会）	島文子	平成23年4月1日～平成26年3月31日
大学図書館シンポジウム企画・運営委員会（国公私立大学図書館協力委員会）	杉田茂樹	平成26年4月1日～平成28年3月31日
大学図書館協力ニュース編集委員会（国公私立大学図書館協力委員会）	杉田茂樹	平成25年4月1日～平成26年3月31日
大学図書館協力ニュース編集委員会（国公私立大学図書館協力委員会）	大山努	平成26年4月1日～平成28年3月31日
大学図書館研究編集委員（国公私立大学図書館協力委員会）	竹内茉莉子	平成25年4月1日～平成26年3月31日
大学図書館研究編集委員（国公私立大学図書館協力委員会）	佐野悠	平成26年4月1日～平成27年3月31日
大学図書館研究編集委員（国公私立大学図書館協力委員会）	伊勢幸恵	平成27年4月1日～
大学図書館コンソーシアム連合作業部会	三角太郎	平成26年4月1日～平成27年7月31日 平成28年4月1日～
大学図書館コンソーシアム連合作業部会	池尻亮子	平成27年7月1日～
機関リポジトリ推進委員会	杉田茂樹	平成25年8月1日～平成28年3月31日
機関リポジトリ推進委員会ワーキンググループ	三角太郎	平成26年7月22日～
機関リポジトリ推進委員会ワーキンググループ	中原由美子	平成26年7月22日～平成27年3月31日
これからの学術情報システム構築検討委員会NACSIS-CAT検討作業部会	三角太郎	平成27年7月15日～
目録委員会（日本図書館協会）	木下　直	平成27年4月1日～平成28年3月31日
千葉市図書館協議会副委員長	杉田茂樹	平成25年4月1日～平成26年3月31日
千葉市図書館協議会副委員長	大山努	平成26年4月1日～平成28年3月31日
千葉市図書館情報ネットワーク協議会理事	杉田茂樹	平成25年4月1日～平成26年3月31日
千葉市図書館情報ネットワーク協議会理事	大山努	平成26年4月1日～平成28年3月31日
デジタルリポジトリ連合運営委員会	杉田茂樹	平成25年4月1日～平成28年3月31日
デジタルリポジトリ連合企画ワーキング委員	武内八重子	平成25年4月1日～平成27年3月31日
デジタルリポジトリ連合企画ワーキング委員	三角太郎	平成26年5月23日～平成27年3月31日
デジタルリポジトリ連合企画ワーキング委員	塩田知也	平成27年5月14日～平成28年3月31日
COAR Repository Content Working Group	杉田茂樹	平成25年4月1日～平成28年3月31日

11. 各館特記

※数値はいずれも附属図書館内調査

11.1. 本館

11.1.1. L 棟改修

平成 26 年 10 月に，前年度後半から改修工事を行っていたＬ棟がリニューアルオープンした。これにより，既に整備されていた 3 つの建物とあわせて，西千葉キャンパスにおける「場所としての図書館」の設備が整った。4 つの建物は下記のとおり，それぞれ異なるコンセプト・役割を持ち相互に補完しながら附属図書館/アカデミック・リンク・センターの活動の場を構成している。

・L 棟（Learning）：黙考する図書館
・I 棟（Investigation）：研究・発信する図書館
・N 棟（Networking）：対話する図書館
・K 棟（Knowledge）：知識が眠る図書館

Ｌ棟は，「黙考する図書館」というコンセプトにもとづき，一人静かに資料を読み込んだり，思考する空間と位置付けられており，そのため一般書を中心とする資料とともに多くの閲覧席が設置されている。閲覧席エリアは会話禁止であり，隣接する書庫としての役割を重視した K 棟とともに伝統的な図書館機能を提供している。その上で，多様な利用形態へ対応するため，下記の特徴的な施設を有している。

・静寂閲覧室（2～4 階）：通常の閲覧席とはガラス壁で仕切られている。防音性の高いガラスにより，周囲の音は遮断し，かつ室外との視認性は確保している。室内では会話が禁じられ，電卓やキーボード等の音の出る機器の利用も禁止となっている。
・ブックハウス（2 階）：授業や教員に関する情報を集約する空間。N 棟プレゼンテーションスペースで実施しているショートセミナー「1210 あかりんアワー」の教員企画関連資料や授業ごとに関連情報をまとめた「授業資料ナビゲータ」に記された図書，教員寄贈著書等を配架した。80 インチの大型ディスプレイを設置し，千葉大学や附属図書館/アカデミック・リンク・センターに関する情報を発信している。平成 28 年度以降，教員や研究・教育に関する情報の集約・発信を強化する予定である。
・コミュニケーションエリア（2 階）：L 棟は静寂な空間を基本とするが，N 棟のコミュニケーションエリアから連続する場所に同様の機能を持たせ，利用の高かったアクティブ・ラーニング・エリアの拡充を図った。
・ラウンジ（1 階）：カフェ風の机・椅子やソファ等を配したカジュアルな空間。生協ブックセンターとガラス壁を隔てて接しているため，双方の様子を見ることができる。ともに本を扱う図書館と書店を繋げ，共同する取り組みでの活用が可能となっている。

・学生用端末コーナー（2 階）：静寂な空間に 8 台の端末を設置している。L 棟改修前は，図書館内の全ての学生用端末を N 棟 3 階のコミュニケーションエリアに配置していたが，静かな環境で利用したいという需要に対応するために移設した。
・屋外テラス（3 階）：L 棟 3 階は南側が屋上になっており，緑豊かな「かたらいの森」に面した空間を利用者が自由に出入りできるテラスとして利用している。資料の持ち出しや，携帯電話の使用が可能となっている。

また，リニューアルオープンの際には，本学卒業生である作家の海堂尊氏の講演会（コミュニケーションエリア）や学生・職員によるビブリオバトル（ラウンジ），謎解き型の館内オリエンテーリング（全館）等のイベントを開催した。

11.1.2. 展示企画「てとり文庫」

「てとり文庫」は，学生の学習意欲・読書意欲を促すことを目的としたテーマ展示である。学習支援に役立つテーマや時事的話題から特定のテーマごとに図書を集め，N 棟と K 棟をつなぐ 3 階のスペースに 3 か月間展示している。

企画は，利用者としての学生と直接接することの多い閲覧担当の非常勤職員が担当し，なるべく親しみやすい内容になることを心掛けている。展示方法は，誰でも気軽に手にとることができるよう工夫し，貸出も可能としている。また，感想ノートを備え付け，学生からの意見を募り，以降の企画に反映させている。

展示記録

展示期間	企画名	貸出回数	展示冊数	貸出冊数	割合%
平成 25 年 5～7 月	あんな仕事，こんな仕事，仕事のあれこれ	136	121	72	60
平成 25 年 8～9 月	ジェンダー　男と女	71	110	49	45
平成 25 年 11 月～26 年 1 月	Fashion	64	86	33	38
平成 26 年 2～5 月	オリンピックとスポーツ	86	133	61	46
平成 26 年 6～8 月	本	84	171	61	36
平成 26 年 9～11 月	暮らしと人の民俗学	75	184	46	25
平成 26 年 12 月～27 年 2 月	住まい	37	159	28	18
平成 27 年 3～5 月	新エネルギー	11	140	8	6
平成 27 年 6～8 月	境界（ボーダー）	112	186	75	40
平成 27 年 9～11 月	交通	44	135	31	23
平成 27 年 12 月～28 年 2 月	働く	120	201	66	33
平成 28 年 3～5 月	働く～Season 2～	150	160	96	60

11.1.3. 学生選書企画の実施

平成 26 年度より，学生や若手研究者支援を目的とする千葉大学 SEEDS 基金から学生用図書を充実させるための予算措置を受けることとなった。主たる用途は，学生から図書館へ寄せられる購入希望図書費用であるが，通常のリクエストの他に生協ブックセンターと共同して学生選書企画を実施した。

選書方法は，生協ブックセンターの店舗において，学生が図書館に備え付けて欲しいと思った図書を推薦用紙とともに所定の場所に置くことで，一定期間後に図書館に配架されるというものである。実績として，平成 26 年度後期（12 月～2 月）40 冊，平成 27 年度前期（5 月～8 月）42 冊，平成 27 年度後期（11 月～2 月）57 冊，の図書が選定された。

11.1.4. 「ひまわり 8 号」配信データディスプレイの設置

気象庁の静止地球環境衛生「ひまわり 8 号」は平成 27 年 7 月から正式運用されたが，千葉大学では環境リモートセンシング研究センター（CEReS）がデータ配信機関として研究利用向けにデータの提供を行っている。貴重なデータを広く活用するため，運用開始にあわせて CEReS により附属図書館入館ゲート横に映像配信用の機器が設置された。これは，40 インチの 4K ディスプレイ 6 枚によるマルチディスプレイ（縦 180cm x 横 150cm 程度）で構成され，常時最新の地球の様子を高精彩に映し出している。

学内でも人の多く集まる図書館に設置することで，衛星からの高品質なデータを提供するとともに千葉大学の研究活動の一端を発信する役割を果たしている。

11.2. 亥鼻分館

11.2.1. 第 2 集密書庫の活用

亥鼻分館地下 1 階の第 2 集密書庫には，平成 26 年 8 月まで本館改修工事に伴って本館から退避した雑誌の一部を仮配置していたが，平成 27 年 3 月に経年により利用の少なくなった図書を亥鼻分館 3 階から移動して，書庫としての運用を開始した。利用の多寡に応じて開架書架と集密書庫を使い分けることで，効率的な資料配置にすることができた。

11.2.2. 会話可能エリアの設置

亥鼻分館には本館のアクティブ・ラーニング・スペースのような申込不要で利用できるグループ学習可能な閲覧席がなかったため，2 階グループ閲覧室の一部を転用して，約 50 ㎡の小さな会話可能エリアを設置した。平成 27 年 12 月から試行運用を開始したところ一定の利用があり，また継続を望む意見が寄せられたことから，平成 28 年度も継続して運用している。

11.2.3. 古医書コレクションの電子化

古医書コレクションの主体は，江戸時代から明治時代初期に出版・書写された医書で，和方，漢方，蘭方，洋方など多岐にわたる。また医学以外では，天文，和算，文学，史書等の書籍も若干含まれている。

亥鼻分館では，平成 19 年度より継続して千葉医学会から助成をいただき，「千葉大学附属図書館亥鼻分館所蔵　古医書コレクション」の撮影による電子化を行い，資料画像をウェブ上で公開してきた。平成 27 年 6 月には目録公開システムを更新して資料画像の提供ができるようになったことから，コレクション目録の検索と資料画像の閲覧が一連で行えるようになった。

平成 25-27 年度　電子化資料一覧

資料名	冊数	著者名	出版年
按腹図解	1	太田晋斎	文政 10 年
遠西医方名物考	12	宇田川 榛斉（玄真）	文政 5 年
遠西医方名物考 補遺	3	宇田川 榛斉（玄真）	文政 5 年
和蘭眼科新書	5	プレンキ ，杉田 立卿	文化 12 年
貝原養生訓	4	貝原 益軒（篤信）	文化 9 年
蚘病発蘊	1	糟谷 駿	天保 4 年
眼科錦嚢	6	本庄 晋一	天保 2-8 年
眼科摘要	9	ポンペ	明治 2 年
眼目暁解	1	根来 東叔	文化 14 年
眼目精要（星）	1	藤井 見隆	享保 11 年

奇魂(尚古医典)	2	佐藤 民之助	天保 2 年
経穴彙解	8	原 南陽	嘉永 7 年
健全学	6	杉田 玄瑞 訳	慶応 4 年
皇国医系	1	万年 櫟山(純)	文久元年
産科発明	3	奥沢 軒中	天保 4 年
衆方規矩 合類	1	(記載なし)	貞享 2 年
十四経絡発揮和解(十四経和語鈔)	4	岡本 一抱子	元禄 6 年
蕉窓雑話	2	和田 東郭	文政 4 年
設里烏私図	1	セリウス	(不明)
素問玄機原病式	1	劉 完素	延宝 5 年
難経本義諺解	12	岡本 為竹	宝永 3 年
撥翳鍼訣	2	鈴木 章(道順)	嘉永元年
補注 洗冤録集證	3	宋 慈	光緒 33 年
本朝食鑑	10	平野 必大	元禄 8 年
馬嶋眼科方書(馬嶋流眼科方書)	1	尾州 大一坊	永正 11 年
薬性能毒(上・下)	1	曲直瀬 玄朔	寛永 7 年
瘍科秘録	12	本間 棗軒 , 玄調	弘化 4 年
続 瘍科秘録	5	本間 玄調	安政 6 年
和蘭用薬便覧	1	日高 涼台	天保 8 年
和蘭用薬便覧 附録	2	日高 涼台(六六堂)	弘化 4 年

11.2.4. 特定非営利活動法人日本医学図書館協会への参加

(1) 資料整備

医学図書館協会による電子ジャーナルコンソーシアムに参加することにより,「ProQuest Health and Medical Complete」,「Annual Reviews 12title package」等を有利な条件で契約している。また, 会員館が所蔵する生命科学及び保健関係雑誌の欠号補充に寄与することを目的とした重複雑誌交換に毎年参加し, 他機関の資料整備にも貢献している。

重複雑誌交換実績

	提出冊数		他機関からの受領冊数		他機関への譲渡冊数	
	日本語	外国語	日本語	外国語	日本語	外国語
平成 25 年度	25	206	62	1	0	5
平成 26 年度	92	36	0	0	1	2
平成 27 年度	151	806	0	0	17	11

(2) 研修事業

平成 25 年 8 月 26 日(月)～28 日(水)に第 20 回医学図書館員基礎研修会が千葉大学附属図書館本館 I 棟を会場として開催され，職員（本館・亥鼻分館から各 1 名）が運営に参加した。

11.2.5. 学生選書企画の実施

亥鼻分館では学生希望図書の受付は随時実施しているが，千葉大学 SEEDS 基金より提供された学生用資料費を活用して学生選書企画を実施した。

(1) 選書ツアー

平成 27 年 11 月 5 日(木)に亥鼻キャンパス正門前の医学書専門書店である志学書店本店にて選書ツアーを開催した。参加者は 1 名であった（5 冊選定）。

(2) 自由選書

選書ツアーは日時が限定されるため参加できない学生が多いことが考えられたため，平成 27 年 11 月 6 日(金)～20 日(金)に志学書店本店で自由選書企画を実施した。選定した図書に推薦理由（任意）等を記入した申込用紙を挟んで店内に設置したブックトラックに置くという方法で，期間中に 6 冊が選定され重複を除いた 5 冊を購入した。

11.2.6. 1210 あかりんアワー中継の実施

本館で開催している 1210 あかりんアワーについて，火曜日の「教員が研究の楽しさを語る」に亥鼻キャンパスの教員が登壇した回を，亥鼻分館の会話可能エリアで試行として生中継した。各学部とも必修の授業が多いことに配慮して，この時間のみ飲食を可能としたところ，参加した学生は昼食をとりながら教員の話に熱心に耳を傾けていた。

- 平成 27 年 12 月 1 日：正木治恵先生（看護学研究科）「看護学から捉える高齢者の特徴」参加者 2 名
- 平成 27 年 12 月 15 日：谷口俊文先生（医学部附属病院感染症内科・国際医療センター）「臨床の現場で研究を活かす－EBM(Evidence-Based Medicine)とは」 参加者 4 名

11.3. 松戸分館

11.3.1. 「アクティブラーニングエリア」の設置

第三期中期計画に基づきアクティブ・ラーニング機能強化が求められ，平成 24 年 8 月に松戸分館 1F雑誌閲覧室の一角にアクティブ・ラーニング・スペースを設置した。グループ学習を主体として一定数の利用があったが，設置形態や面積の不足によりアクティブ・ラーニング本来の目的を果たすには至らない環境であった。

これを鑑みて平成 27 年度にはアカデミック・リンク・センター機能の松戸分館敷衍を主眼として，多年にわたり提出してきた概算要求による改修計画と並行して，学長裁量経費によるアクティブ・ラーニング機能強化を目的とした新たな改良に踏み切ることとした。

入口にはスライドドアを設置してホールへの音漏れを防止し，従来の 4 人掛け平机を可動式什器（机，椅子各 60）に転換，さらにホワイトボード 20 台を配置してフロア全体の一体化をはかった。

既存雑誌架はそのままであるが，新たに「アクティブラーニングエリア」という名称を付け，機能強化を印象づけるものとして同年 11 月より利用開始となった。

なお，これまで使用してきたアクティブ・ラーニング・スペースはグループ学習室としてゼミや打合せに使用されている。

11.3.2. 学生選書企画の実施

これまでも松戸分館では学生購入希望による選書を行ってきたが，平成 27 年度には千葉大学 SEEDS 基金から提供された予算により，初めて学生選書企画を実施した。松戸キャンパス内千葉大学生協園芸学部店にて平成 27 年 11 月 9 日より 11 月 20 日まで実施，29 点が選書購入となった。

11.3.3. 1210 あかりんアワー中継の実施

本館開催による 1210 あかりんアワーは，身近な教員が登壇することにより人気を博しているが，アカデミック・リンク機能の敷衍と本・分館利用者間の一体化を目的として中継実現が求められてきた。

亥鼻分館とともに同時中継の試行実験が行われ，安定性など確保できたことから松戸キャンパス所属教員登壇に際し，平成 28 年 1 月に初めての中継を「アクティブラーニングエリア」において実施した。

- 平成 28 年 1 月 19 日：赤坂信先生（園芸学研究科）「ランドスケープとイマジネーション　－「八景」という風景の把握と理解－」 参加者 10 名

11.3.4. 論文・レポートの書き方についての図書コーナーの設置

これまで，初めて卒論を書く学部生のために科学論文や理系論文の書き方を中心とした図書を取り揃え，さらに英語論文作成法や国際学会プレゼンテーションまで拡張して国際化対応をはかってきた。しかし，近年はバイオテクノロジー，生命科学等の特定分野を対象に編集された図書が増えてきたため，利用促進を目的として約 70 点を抜き出し，平成 27 年 6 月に「論文・レポートの書き方についての図書コーナー」として玄関ホールに仮設整備した。

主軸である論文・レポートの書き方に加え，研究生活や研究計画デザインに関する入門書やラボノートの書き方，実験レポート作成，アンケート調査の入門書，著作権や研究倫理といった資料も加え，学術研究全般に及ぶ幅広い資料が揃うこととなった。半年間で利用数が倍増し，一定の効果が認められたため，年度末までに 40 点ほど新たに追加して平成 28 年度から常設化することとした。

平成25年度計画の実施状況に基づく自己点検・評価（抜粋）

計画No.	中期計画	平成25年度計画	平成25年度計画確認事項	担当組織	自己評価	判断理由となる計画の進捗状況	最終評価	コメント
19-2	◆　アクティブ・ラーニングの手法を取り入れた科目やICTを活用した教育方法の量的・質的改善、TAの充実等を通して、学習の双方向性を確保し、主体的な学びに裏打ちされた情報発信能力を涵養する。	◆　アカデミック・リンク・センターは、アカデミック・リンクの基本3機能の定着に向けて、「授業資料ナビゲータ」に含まれるコンテンツの電子的提供、コンテンツ作成・提供に必要な権利処理手続き・体制の確立等を進める。	①　アカデミック・リンク・センターの広報活動及びセミナーの開催状況 ②　「授業資料ナビゲータ」に含まれるコンテンツの電子的提供状況 ③　コンテンツ作成・提供に必要な権利処理手続き・体制の確立等の推進状況	アカデミック・リンク・センター	Ⅳ	①　アカデミック・リンクの理念を広報するとともに、学習支援、高等教育におけるICTの活用などをテーマとしたアカデミック・リンク・セミナーを、平成25年4月～平成26年3月に5回開催し、合計212名の参加者があった。各回の動画をウェブサイトにて公開した。プレゼンテーションスペースにて開催する「1210あかりんアワー」を平成25年4月～平成26年1月に62回開催し、約1,600名が参加した。 ②　「授業資料ナビゲータ」に含まれるコンテンツのうち、電子的に提供されているデータベース・Webサイト141件、電子ブック25タイトルを整備した。 ③　平成25年7月にアカデミック・リンク・センターに電子教材の開発活用に関する共同研究部門を設置し、コンテンツ作成・提供に必要な権利処理の体制を整えた。権利処理手続きについて、著作権者と包括的協議を行うための活動を継続し、大学学習資源コンソーシアムの設立を準備した。	Ⅳ	≪評価コメント≫ 共同研究部門を設置し、コンテンツ作成・提供に必要な権利処理の体を構築したこと、さらに著作権者との包括的協議を継続実施し、大学学習資源コンソーシアム設立に向け取組を推進していることは高く評価できる。
23	◆　附属図書館は、学習上必要な資料の体系的整備を行うとともに、教員と連携して授業に密着した情報提供機能を拡充、強化する。また、ICT環境を整備し、教育環境を充実させる。	◆　附属図書館は、授業に密接した資料（デジタル資料も含む）の整備を引き続き体系的に進める。また、アカデミック・リンク・センターと連携し、学習支援を充実させる。	①　授業に密接した資料（デジタル資料を含む）の整備状況 ②　アカデミック・リンク・センターとの連携による学習支援を充実した事例	附属図書館	Ⅲ	①　附属図書館は、平25年度に普遍教育を中心とする69科目について授業資料ナビゲータを作成し、関連する図書412冊を新規購入して、授業に密接した資料を整備した。 ②　アカデミック・リンク・センターと連携して、SA(ALSA-LS)による学習支援を継続実施するとともに、教員によるオフィスアワー＠アカデミック・リンクや図書館員によるレファレンスサービスを継続し、学習支援を充実した。レファレンスサービスは平成25年度に計101件を実施した。学習支援を充実させるため、平成25年7月から開館時間を30分繰り上げ、8時30分開館の試行を開始した。	Ⅲ	

平成25年度計画の実施状況に基づく自己点検・評価（抜粋）

計画No.	中期計画	平成25年度計画	平成25年度計画確認事項	担当組織	自己評価	判断理由となる計画の進捗状況	最終評価	コメント
39	◆ 「知の拠点」として、学会発表、論文発表、プレスリリース、ウェブサイト等による公開や、各教員の研究成果等をデータベース化し、研究活動の実態と成果を広く社会にわかりやすく発信する体制を整備する。	◆ 各教員の研究成果等をプレスリリース、ウェブサイト等により広く社会に発信し、社会還元することを推進する。また、研究者情報管理運営委員会は、研究者情報の登録促進及び研究者情報データベース（CUFA）に必要となる機能追加について検討するとともに、研究者情報の利用について、ReaD & Researchmap(JST)等他機関との連携を含め検討を進める。	① 研究成果等を社会に発信し、社会還元した事例	附属図書館	Ⅲ	各部局において、研究成果を社会に発信するため、書籍・ニュースレターの発行やウェブサイトへの論文掲載、公開講座・セミナーの開催、プレスリリースなどが積極的に実施されており、研究成果が十分に社会還元された。	Ⅲ	≪指摘事項≫ 研究成果等の外部発信について、英語版の必要性が考えられる。国際化に対応した計画が必要ではないか。
77	◆ 教育研究等に関する基本情報や教育・研究データベースを活用した学術成果の情報等大学の有意な教育研究活動の成果を広く公開する。また、自己点検・評価や第三者評価の結果等の法人運営に関する基本情報について、適切に公開する。	◆ 学外向けウェブサイト等により、教育研究情報が社会により効果的に伝わるよう改善・充実を図るとともに、学術研究成果の一部を「研究成果の見える化」と題し、冊子及びウェブサイトにより学内外に発信する。また、英語版ウェブサイトについて、内容の充実を図る。附属図書館は、学内関係部局と連携を進め、紀要等の学内刊行物に掲載された学術成果や学位論文の電子的な公開を促進する。	④ 紀要等の学内刊行物に掲載された学術成果や学位論文の電子的な公開の促進状況	附属図書館	Ⅲ	千葉大学学術成果リポジトリ(CURATOR)については、平成25年度に新たに539件を登録し、総数で89,157件の研究成果を公開した。紀要等の学内刊行物については、現在刊行中の11誌すべてを登録済みである。博士学位論文については、62件（平成25年9月学位授与分の全件）の全文または要約を新規登録し、累計796件となった。学位論文のインターネットによる公開を行うため、学務部教務課と連携して、説明資料を作成した。平成25年度のリポジトリのダウンロード件数は、1,647,917件であった。	Ⅲ	

平成26年度計画の実施状況に基づく自己点検・評価（抜粋）

計画No.	中期計画	平成26年度計画	平成26年度計画確認事項	担当組織	自己評価	判断理由となる計画の進捗状況	最終評価	コメント
19-2	◆　アクティブ・ラーニングの手法を取り入れた科目やICTを活用した教育方法の量的・質的改善、TAの充実等を通して、学習の双方向性を確保し、主体的な学びに裏打ちされた情報発信能力を涵養する。	◆　アカデミック・リンク・センターは、アカデミック・リンクの基本3機能の定着に向けて、引き続き、コンテンツの電子的提供、コンテンツ作成・提供に必要な権利処理手続き等を進めるとともに、それらの評価を行う。	①　コンテンツの電子的提供状況 ②　コンテンツ作成・提供に必要な権利処理手続き・体制の確立等の進捗状況 ③　「①、②」の評価の実施状況	アカデミック・リンク・センター	Ⅳ	①　「授業資料ナビゲータ」に含まれるコンテンツのうち、電子的に提供されているデータベース・webサイト161件、電子ブック29タイトルを整備した。また授業紹介動画42点、アカデミック・リンク・セミナー全会の動画を作成しYouTube上で公開するほか、授業動画2科目を作成し、Moodle上で公開するため提供した。 ②　教材制作のための権利処理手続きを効率的に進めるために、大学学習資源コンソーシアムを平成26年5月に設立し（事務局は千葉大）、著作権者と包括的協議を開始した。コンソーシアムには全国から18大学（平成27年3月1日現在）が参加した。 ③　アカデミック・リンク・センター評価委員会を開催（平成27年1月23日）し、外部評価委員による評価を実施した。その評価をもとに評価報告書と資料集を発行した。	Ⅳ	≪評価コメント≫ 教材制作のための権利処理手続きを効率的に進めるために、大学学習資源コンソーシアムを設立し、著作権者と包括的協議を開始したことは評価に値する。
23	◆　附属図書館は、学習上必要な資料の体系的整備を行うとともに、教員と連携して授業に密着した情報提供機能を拡充、強化する。また、ICT環境を整備し、教育環境を充実させる。	◆　附属図書館は、授業に密接した資料（デジタル資料を含む）の整備を体系的に進める。また、アカデミック・リンク・センターと連携し、学習支援を充実させる。	①　授業に密接した資料（デジタル資料を含む）の整備状況 ②　アカデミック・リンク・センターとの連携による学習支援を充実した事例	附属図書館	Ⅲ	附属図書館は、平成26年4月～平成27年1月に普遍教育を中心とする93科目について授業資料ナビゲータを作成し、関連する図書564冊を新規購入して、授業に密接した資料を整備した。さらに、アカデミック・リンク・センターと連携して、SA(ALSA-LS)による学習支援を継続実施するとともに、教員によるオフィスアワー＠アカデミック・リンクや図書館員によるレファレンスサービスを継続し、学習支援を実施した。レファレンスサービスは平成26年4月～平成27年1月に計68件（クイックレファレンスを除く）を実施した。	Ⅲ	

平成26年度計画の実施状況に基づく自己点検・評価（抜粋）

計画No.	中期計画	平成26年度計画	平成26年度計画確認事項	担当組織	自己評価	判断理由となる計画の進捗状況	最終評価	コメント
39	◆ 「知の拠点」として、学会発表、論文発表、プレスリリース、ウェブサイト等による公開や、各教員の研究成果等をデータベース化し、研究活動の実態と成果を広く社会にわかりやすく発信する体制を整備する。	◆ 各教員の研究成果等をプレスリリースやウェブサイトにより広く社会に発信し、社会還元することを推進する。また、研究者情報データベース（CUFA）と各種情報データベースとの連携を進める。	① 研究成果等を社会に発信し、社会還元した事例	附属図書館	Ⅲ	各部局において、研究成果を社会に発信するため、書籍・ニュースレターの発行やウェブサイトへの論文掲載、公開講座・セミナーの開催、プレスリリースなどが積極的に実施されており、研究成果が十分に社会還元された。	Ⅲ	
77	◆ 教育研究等に関する基本情報や教育・研究データベースを活用した学術成果の情報等大学の有意な教育研究活動の成果を広く公開する。また、自己点検・評価や第三者評価の結果等の法人運営に関する基本情報について、適切に公開する。	◆ 学外向けウェブサイト等により、教育研究情報が社会により効果的に伝わるよう改善・充実を図るとともに、学術研究成果の一部を「研究成果の見える化」と題し、冊子及びウェブサイトにより引き続き学内外に発信する。 また、自己点検・評価や第三者評価の結果等の法人運営に関する基本情報の公開について、充実を図る。 さらに、英語版ウェブサイトについて、内容の充実を図る。 附属図書館は、学内関係部局と連携を進め、紀要等の学内刊行物に掲載された学術成果や学位論文の電子的な公開を促進する。	⑤ 紀要等の学内刊行物に掲載された学術成果や学位論文の電子的な公開の促進状況	附属図書館	Ⅲ	千葉大学学術成果リポジトリ(CURATOR)については、平成26年4月～平成27年1月に新たに574件を登録し、総数で89,667件の研究成果を公開した。紀要等の学内刊行物については、現在刊行中の11誌すべてを登録済みである。学位論文は、平成26年4月～平成27年1月に161件を新規登録し、総数で958件を登録した。平成26年4月～平成27年1月のリポジトリのダウンロード件数は、1,206,098件であった。	Ⅲ	

平成27年度計画及び第2期中期目標期間の実施状況に基づく自己点検・評価（抜粋）

第2期中期計画（平成22～27年度）					平成27年度計画					
計画No.	中期計画	担当組織	自己評価	判断理由となる中期計画の実施状況	平成27年度計画	平成27年度計画確認事項	自己評価	判断理由となる年度計画の進捗状況	最終評価	最終評価
19-2	◆　アクティブ・ラーニングの手法を取り入れた科目やICTを活用した教育方法の量的・質的改善、TAの充実等を通して、学習の双方向性を確保し、主体的な学びに裏打ちされた情報発信能力を涵養する。	アカデミック・リンク・センター	Ⅳ	・　平成２３年４月に、課題探究能力を備えた「考える学生」を創造することを目的としてアカデミック・リンク・センターを設置し、①空間整備（アクティブラーニングに適した空間設計にもとづく附属図書館の増改築など）、②コンテンツ整備（アクティブラーニングに資する授業紹介動画コンテンツの制作、電子教材の作成・利活用・流通に関する手法開発及びそのための課題解決に向けた大学間コンソーシアムの設立など）、③人的学習支援（学生のニーズに即した、大学院生による双方向ラーニングサポート体制の創出など）等の活動を展開し、年5回程度開催のアカデミック・リンクセミナー等を通じ活動成果の全国への普及を図った。 諸実績については次の通り。 ・　附属図書館増改築　全15,808㎡（アクティブ・ラーニングスペース（556席）、プレゼンテーションスペース（75人収容）、ラウンジ（66席）、静寂閲覧室（115席）、学生用PC75台などを含む） ・　授業紹介動画　36科目（平成27年度） ・　１２１０あかりんアワー　245回（通算） ・　ラーニングマネジメントシステム（Moodle）対応科目　1217科目（平成27年度） ・　大学院生ラーニングサポートによる学習相談対応　434回（平成27年度） ・　大学学習資源コンソーシアム　平成26年創設、平成28年3月現在19大学が参加 ・　学生による学習・研究発表、文化的活動成果の展示会等の開催支援　9回（平成27年度）	◆　アカデミック・リンク・センターはアカデミック・リンクの基本3機能の定着に向けて、コンテンツの電子的提供、コンテンツ作成・提供に必要な権利処理手続き等を進めるとともに、評価結果に基づき、新たな活動を計画し、実行する。	①　コンテンツの電子的提供状況 ②　コンテンツ作成・提供に必要な権利処理手続きの進捗状況 ③　評価結果に基づいた新たな活動の計画・実行状況	Ⅳ	①　平成27年4月～平成28年2月に「授業資料ナビゲータ」に含まれるコンテンツのうち、電子ブック29タイトルを整備し、データベース・Webサイト94件を収録した。授業などの収録70件を行い、また授業紹介動画36件を作成しYouTube上で公開するほか、反転授業用動画の2件を作成し、Moodle上での公開用に提供した。また、1210あかりんアワーの亥鼻・松戸両キャンパスへの配信を行った。 ②　教材制作のための権利処理手続きを効率的にすすめるために設置した大学学習資源コンソーシアム（CLR）では学術著作権協会と協議の上、著作物の教材への利用実態調査を開始し、CLR加盟大学は、調査期間における学術著作権協会管理著作物の教材への利用許諾を得た。なお、CLRには新たに1大学が参加し、計19大学となった。 ③　新たに技術職員1名を配置してMoodle支援体制、コンテンツ制作室の機能を強化した。授業期間中のPCサポートデスクを設置し、117件のサポートを行った。学内教員に対して電子教材作成についてのアンケートを実施し、回答43件の中からヒアリング17件を行い、教材3件を作成した。	Ⅳ	Ⅳ

平成27年度計画及び第2期中期目標期間の実施状況に基づく自己点検・評価（抜粋）

第2期中期計画（平成22～27年度）					平成27年度計画					
計画No.	中期計画	担当組織	自己評価	判断理由となる中期計画の実施状況	平成27年度計画	平成27年度計画確認事項	自己評価	判断理由となる年度計画の進捗状況	最終評価	最終評価
23	◆　附属図書館は、学習上必要な資料の体系的整備を行うとともに、教員と連携して授業に密着した情報提供機能を拡充、強化する。また、ICT環境を整備し、教育環境を充実させる。	附属図書館	Ⅳ	・　附属図書館において、多角的な手法により、シラバス掲載図書や学生希望図書等学習上必要な資料の体系的な整備（図書68,478冊、電子図書17,012タイトル（平成28年3月25日時点））を行い、累計の蔵書冊数は図書1,387,417冊、電子図書23,022タイトルとなった。また、教員と連携して授業科目毎のパスファインダー「授業資料ナビゲータ」（当該科目の参考資料リスト）を作成（のべ427科目）し、授業に密着した情報提供を行った。平成24年度以降はその作成プロセスを電子化し、紙形式のほかにインターネットを通じた利用も可能とした。加えて、電子的資料を自宅や外出先からも遠隔利用できるシステム（シボレス認証）を整備し利便性を高めた。	◆　附属図書館は、学習上必要な資料が体系的に整備されているかを評価するとともに、授業に密接した資料（デジタル資料を含む）の整備を進める。また、アカデミック・リンク・センターと連携し、学習支援を充実させる。	①　学習上必要な資料が体系的に整備されているかの評価状況 ②　授業に密接した資料（デジタル資料を含む）の整備状況 ③　アカデミック・リンク・センターとの連携により学習支援を充実した事例	Ⅳ	・　附属図書館において、普遍教育を中心とする55科目について授業資料ナビゲータを作成し、その中で紹介した、授業に密接に関連する1,495冊の図書等資料を所定コーナーに配置（うち152冊は新規購入）した。さらに、アカデミック・リンク・センターと連携して、SA(ALSA-LS)による学習支援を継続的に実施するとともに、教員によるオフィスアワー＠アカデミック・リンクやと図書館員によるレファレンスサービスを継続して実施し、学習支援を充実した。加えて、横浜国立大学、お茶の水女子大学との連携により、閲覧回数に基づいて電子ブックを購入するという新しい図書購入方式（PDA）を国内で初めて導入し、学習上の需要に即した166冊（平成28年2月末時点）の電子ブックを整備した。	Ⅳ	Ⅳ
39	◆　「知の拠点」として、学会発表、論文発表、プレスリリース、ウェブサイト等による公開や、各教員の研究成果等をデータベース化し、研究活動の実態と成果を広く社会にわかりやすく発信する体制を整備する。	附属図書館	Ⅲ	・　各部局において、研究成果を社会に発信するため、書籍・ニュースレターの発行やウェブサイトへの論文掲載、公開講座・セミナーの開催、プレスリリースなどが積極的に実施されており、研究成果を十分に社会還元した。 ・　平成28年3月に本学に在籍する教員によって得られた学術研究成果に対する学内外からの自由な閲覧を保証することにより、学術研究のさらなる発展に寄与するとともに、情報公開の促進と社会に対する説明責任を果たすため、オープンアクセスに関する方針を定めた。	◆　研究者情報と各種情報データベースとの連携を継続的に進めるとともに、データベースの拡充及び利用環境の整備・検討を進める。また、各教員の研究成果等をプレスリリースやウェブサイトにより公開するなど、広く社会に発信し、社会還元することを推進する。	②　研究成果等を社会に発信し、社会還元した事例	Ⅲ	・　各部局において、研究成果を社会に発信するため、書籍・ニュースレターの発行やウェブサイトへの論文掲載、公開講座・セミナーの開催、プレスリリースなどが積極的に実施されており、研究成果を十分に社会還元した。 ・　平成28年3月に本学に在籍する教員によって得られた学術研究成果に対する学内外からの自由な閲覧を保証することにより、学術研究のさらなる発展に寄与するとともに、情報公開の促進と社会に対する説明責任を果たすため、オープンアクセスに関する方針を定めた。	Ⅲ	Ⅲ

平成27年度計画及び第2期中期目標期間の実施状況に基づく自己点検・評価（抜粋）

第2期中期計画（平成22～27年度）					平成27年度計画					
計画No.	中期計画	担当組織	自己評価	判断理由となる中期計画の実施状況	平成27年度計画	平成27年度計画確認事項	自己評価	判断理由となる年度計画の進捗状況	最終評価	最終評価
77	◆　教育研究等に関する基本情報や教育・研究データベースを活用した学術成果の情報等大学の有意な教育研究活動の成果を広く公開する。また、自己点検・評価や第三者評価の結果等の法人運営に関する基本情報について、適切に公開する。	附属図書館	Ⅳ	・　千葉大学学術成果リポジトリ（CURATOR）により、学術論文9,300件、紀要論文2,737件、博士学位論文806件、科学データ46,305件をはじめ、合計61,758件の学術成果を新たに公開し、累計の公開件数は90,243件となった。期間中のダウンロード件数は6,310,712件に上った（平成28年2月末時点）。加えて、平成28年3月に本学の学術成果公開に係る基本方針である「千葉大学オープンアクセス方針」を策定した。	◆　教育研究情報が社会により効果的に伝わるようウェブサイト等の改善・充実を図る。 また、自己点検・評価や第三者評価の結果等の法人運営に関する基本情報の公開について、工夫する。 さらに、英語版ウェブサイトについて、内容の充実を図る。 附属図書館は、学内関係部局と連携を進め、紀要等の学内刊行物に掲載された学術成果や学位論文の電子的な公開を促進する。	④　紀要等の学内刊行物に掲載された学術成果や学位論文の電子的な公開の促進状況	Ⅳ	・　平成28年3月に学術成果公開に係る基本方針として国内としても先駆的事例となる、「千葉大学オープンアクセス方針」を策定した。千葉大学学術成果リポジトリ（CURATOR）については、平成27年4月～平成28年2月に新たに610件を登録し、総数で90,243件の研究成果を公開した。紀要等の学内刊行物については、現在刊行中の11誌すべてを登録済みであり、学位論文は、平成27年4月～平成27年9月に37件を新規登録し、総数で1,140件を登録した。	Ⅳ	Ⅳ

【参考】自己点検・評価書の見方等

平成27年度計画及び第2期中期目標期間の実施状況に基づく自己点検・評価

第2期中期計画（平成22～27年度）						平成27年度計画					
計画No.	中期計画	担当理事	中期計画推進担当	自己評価	判断理由となる中期計画の実施状況	平成27年度計画	平成27年度計画確認事項	自己評価	判断理由となる年度計画の実施状況	最終評価	最終評価
1	◆ 全学協力のもとに質の高い普通教育科目及び全学共通基礎科目カリキュラムを編成、実施し、教養教育と専門教育との円滑な接続を行う。	理事（教育・国際）	教育総合推進部門	Ⅲ	普通教育及び共通専門基礎科目の提供を支える全学出動体制については、全学部との意見交換の際に、全学出動体制の実質化に向けた体制作りの強化について協力を要請している。また、普通教育センター主催の新任教員研修会で説明し、協力を仰いだ。 ・新カリキュラムの中心をなすコア科目の改革に伴い、専門教員集団の主体・創生主との協議を重ね、平成22年度に「普通教育の運営における全学出動体制」に関する申合せ」を決定し、専門教員集団の組織と機能について見直しを行った。 ・教養展開科目については、平成24年度にWGを設置し、教養展開科目の開設数、履修学生数について検討した結果、開設科目数も十分であり、学生の履修も順調であることを確認した。また、共通専門基礎科目については、共通専門基礎科目検討委員会を設置し、高校での科目未履修、文系学生への科目提供の在り方、担当教員の体制などについて検討・改善を行ったほか、各集団において、集団固有の課題を常時確認し、課題の解決に向け検討を行った。 ・平成25年度に普通教育センターに将来構想委員会を設置し、平成27年度実施の普通教育改革に関する具体的な検討を行い、その一環として、普通教育と専門教育の円滑な接続に配慮した普通教育科目の在り方について検討を行った。 ・平成26年度の普通教育科目をもとにナンバリング案を策定し、同案をもとに27年度の普通教育科目担当者への確認を行い、平成27年度に全学的にナンバリングの導入、カリキュラムツリーの作成及び公表を行った。	◆ 普通教育担当の新しい方針に基づく専門教員集団によるナンバリングにより体系化された普通教育新カリキュラムを提供する。	①ナンバリング制度で体系化された普通教育新カリキュラムの提供状況	Ⅲ	・ 教養コア科目においては、科目群及び配置を新たに再編し、教養コア科目の6つの科目群における教員集団において、普通教育1300科目のすべてにナンバーを付し、『Guidance 2015』にナンバリング制度の目的・意義の説明とともにナンバーを付した授業科目一覧を明記した。	Ⅲ	Ⅳ
2	◆ 学士としての目標に応じた基盤的能力、専門中核学力を構築し、高度な専門的知識・技能を修め、創造的思考力を高めることができる教育課程を提供する。	理事（教育・国際）	教育総合推進部門	Ⅲ	・平成23年度に普通教育カリキュラムに関するWGを設置し、普通教育関係のカリキュラムポリシー（案）を策定し、各学部からの意見を聴取して、同ポリシーを決定した。 ・ 普通教育の基盤である教養コア科目について、本学の学士課程教育の方針の視点から見直しを行い、27年度から新カリキュラムを開始した。 ・ 平成25年度に医学部において、教育の質保証の観点からグローバル・スタンダードとなっているOutcome-basededucation（OBE）を他大学に先駆けて導入し、平成25年度末にOBE導入後初めて卒業生が誕生した。 ・ 26年度法政経学部の学部改組において、グローバル化と情報化の進捗する中での問題解決能力に満ちて指導力を発揮できる人材を育成像にしており、それに即した編成を整えた。 ・ 平成26年度より、グローバル人材育成の一層の推進に資するために、第二の教養教育プログラムとしての国際日本学を普通科目240科目で開始し、平成26年度は専門科目1,217食とし、普通科目278科目、学部専門科目244科目、大学院科目619科目の計1,140科目、さらに、平成27年度は普通科目295科目、学部専門科目334科目、大学院科目659科目の計1,288科目へと拡大した。	◆ 各学部・学科は、創造的思考力を高めることができる教育課程を提供するため、学位授与方針に基づく教育課程編成・実施の方針に照らしたカリキュラムの検証結果に基づき、カリキュラムをさらに充実させる。 また、普通教育においては、教育課程編成・実施の方針に基づき、体系性・順次性に配慮した普通教育新カリキュラムを提供する。 グローバル人材育成の一層の推進に資するため、第二の教養教育プログラムである「国際日本学」の科目数を増やし、さらに充実させる。 さらに、学生の履修の状況について、体系性、順次性の観点から調査分析を行う。	①各学部・学科におけるカリキュラムの検証結果に基づきカリキュラムを充実させた事例 ②体系性・順次性に配慮した普通教育新カリキュラムの提供状況 ③「国際日本学」の科目数の変化と充実させた事例 ④学生の履修状況の調査分析状況	Ⅲ	① 文学部では、学士として求められる能力について見直しを行い「専門性を社会に反映していく実践力」を重視したカリキュラムの改変を目指し、文学部共通科目群のなかに、インターンシップ・フィールドワーク科目を新設した。また、これまで卒業要件としては8単位を修得すればよかった文学部共通科目について、28年度の改組に当たっては32単位の履修を義務づけ、国際性・社会性・実践性などの汎用的能力を確実に身につけられるカリキュラムに向けて改革を行った。 ② 普通教育1300科目のすべてにナンバーを付し、『Guidance 2015』にナンバリング制度の目的・意義の説明とともにナンバーを付した授業科目一覧を明記している。 ③ 普通教育における「国際日本学」の開設科目数を、26年度の278科目から295科目へと増加させた。また、普通教育カリキュラムの改革により、教養コア科目の1領域として「国際コア」を開設し、全学生に対して1単位必修とした。 ④ 学生の履修状況については、科目区分ごとの経年変化等のデータ確認を行った。	Ⅲ	Ⅳ
3	◆ 倫理観、コミュニケーション能力や問題解決能力を養う科目を設定し、汎用的な基礎力の向上に資する教育活動を実施する。	理事（教育・国際）	教育総合推進部門	Ⅲ	・ 各部局とも倫理観、コミュニケーション能力や問題解決能力を育成するための科目の実態調査や、それを踏まえた改善策の検討を行った。また、新たな講義の開設や、講義内容の変更など改善に繋げている。また、倫理観、コミュニケーション能力を培うための教育の内容的・体系的充実に向けて、アンケート調査の実施や、授業への反映によるその効果・問題点の点検など具体的な検討を行っている。 ・ 平成23年度に工学部において、倫理教育について学部共通科目ならびに学科独自の科目を開講しており、それらについての内容の見直し等、改善を行った。また、コミュニケーション能力や問題解決能力を育成するための感覚科目として、各学科の1年次前期の導入セミナーならびに4年次通期の卒業研究や各種セミナー科目を点検するとともに、科目の新設も行った。 ・ 薬学部では、平成25年度より、総動的学修要素を重宝に取り入れた、文部科学省選定取組「実践社会薬学の確立と発展に資する薬剤師養成プログラム」を城西国際大学薬学部、千葉科学大学薬学部と連携し共同学士教育プログラムとして始動させ、倫理観、コミュニケーション能力、問題解決能力の更なる醸成に取組んだ。 ・ 普通教育における倫理観を養う科目として、平成26年度から「日本人の国際倫理」を開設した。また、コミュニケーション能力に関しては、国際日本学関連科目としてイングリッシュコミュニケーションを開設し、宮島・松戸キャンパスでも開講した。	◆ 各学部は、汎用的な基礎力の向上に資する教育活動を実施するため、倫理観、コミュニケーション能力や問題解決能力を養う科目の設置実績等、現状の取組状況を踏まえ、学士課程教育としての総合的視点から策定した改善策を汎用的な基礎力の向上に資する教育に生かす。 また、普通教育においては、新カリキュラムの提供とともに、学生に対し、教育課程編成・実施の方針の目的・意義について周知を図る。	①各学部における倫理観、コミュニケーション能力や問題解決能力を養う科目の設置実績 ②学士課程教育としての総合的視点からの改善策を汎用的な基礎力の向上に資する教育に生かした事例 ③普通教育において教育課程編成・実施の方針の目的・意義についての周知状況	Ⅲ	① 薬学部では、生涯倫理や動物実験に関する倫理観を養う授業は、薬理学実習の初回に実習講義として設置している。なお、倫理観に関する授業を次年度から導入、設置することを教務委員会で検討中である。コミュニケーション能力や問題解決能力を養う授業としてチーム医療I～IV、有機化学演習I、II、生物化学演習、薬学総合演習、医療薬学演習I～IIIを設置している。また、実習でのコミュニケーション能力の向上を図るため、薬学総合演習は英語での授業やSGD（Small Group Discussion）を行った。さらに、外国人教員による科学英語コミュニケーションを新しく設置した。 ② 工学部では、コミュニケーション能力（プレゼンテーション能力）や問題解決能力に関する科目について、その能力を養うことに重点を置いて演習の内容を変更した。建築学科では、JABEEの基準に対応する科目を設定している。デザイン学科では、演習課題の成果を、学生たちが主体的にデザイン展示会（日本橋大の丸京ビルイートウィークや世界最大のミラノサローネ）に出展するよう指導した。 ③ 普通教育の教育課程編成・実施の方針は、普通教育を担当する全教員に配布する「普通教育ハンドブック（ルール）」に掲載しており、シラバスの作成時にも同方針についての注意を促している。学生は、この方針に基づいて、身につけることが期待される能力をシラバスに明記しており、教育効果の公開結果については、普通教育委員会、専門教員集団主任・副主任会議で配布し、同方針の目的・意義の周知に努めている。	Ⅲ	Ⅲ

中期計画推進担当組織による平成２７年度及び第２期中期目標期間の実施状況の自己評価

※計画によっては中期計画推進担当組織が複数あり

中期目標対応部会による平成２７年度及び第２期中期目標期間の実施状況の最終評価と判断理由

※評価がⅣの計画については、最終評価欄のセルに色（桃色）を付けています。

＜点検・評価のスケジュールと自己点検・評価の方法＞

① 大学全体の実施状況の確認（2 月 9 日～3 月 3 日）

⇒ 中期計画推進担当組織及び実施担当部局等に平成 27 年度計画の実施状況を確認〔平成 27 年度計画実績報告書基礎資料を作成〕

⇒ 業務方法書第 10 条第 2 項に基づく業務の手順の確認について、年度計画の実施状況の依頼の際に併せて行い、全ての部局等においては、業務執行について必要とされる業務の手順を踏まえたものとなっている。

② 中期計画推進担当組織による自己評価（3 月 14 日～3 月 31 日）

⇒ ①により収集、作成した「実績報告書基礎資料」を参考に、中期計画推進担当組織がそれぞれの担当する計画について、全学的にみた実施状況等を把握・分析し、4 段階判定により総合的に自己評価を実施。また、自己評価の「判断理由となる計画の実施状況」を記載。

【自己評価（4 段階判定）】

Ⅳ：「年度（中期）計画を上回って実施している」

Ⅲ：「年度（中期）計画を十分に実施している」

Ⅱ：「年度（中期）計画を十分には実施していない」

Ⅰ：「年度（中期）計画を実施していない」

③ 中期目標対応部会による最終評価（4 月 12 日～4 月 21 日）

⇒ ①により収集した大学全体の実施状況及び②の中期計画推進担当組織による自己評価を基に、**＜評価の視点＞**を踏まえ、4 段階判定により点検・評価を実施。

【最終評価（4 段階判定）】

Ⅳ：「年度（中期）計画を上回って実施している」

Ⅲ：「年度（中期）計画を十分に実施している」

Ⅱ：「年度（中期）計画を十分には実施していない」

Ⅰ：「年度（中期）計画を実施していない」

＜評価の視点＞

◆ 第三者的な視点で点検・評価を実施（学外者が評価した場合を想定して客観的に実施）

◆ 年度計画（中期計画）に記載の取組が実施されているか？

◆ 実施状況から判断して年度計画（中期計画）が達成されたか？

◆ 「実績報告書基礎資料」に記載されている全学の状況及び自己評価の判断理由等から勘案して、中期計画推進担当組織が行った自己評価は妥当なものか？

④ 自己点検・評価書完成（5 月）

※ 「平成 27 年度計画実績報告書基礎資料」については、企画政策課ウェブサイトに掲載